

調査研究報告

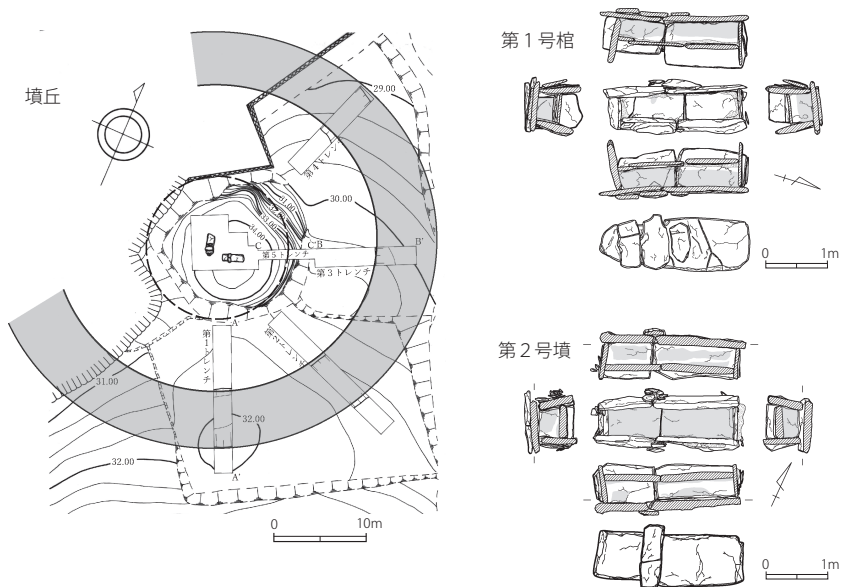
つくば市甲山古墳の研究 —考察編—

筑波大学甲山古墳研究グループ

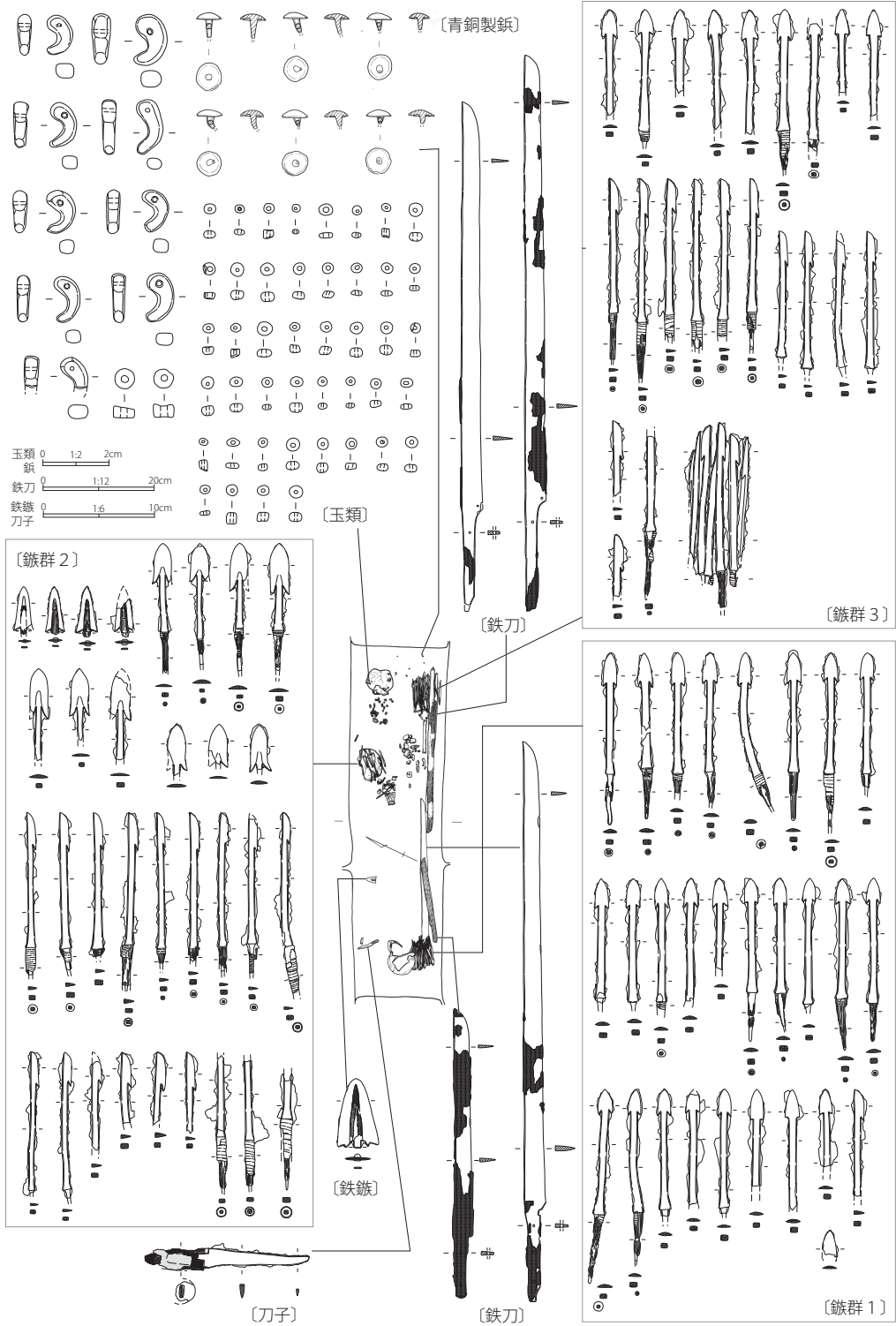
はじめに

茨城県つくば市に所在する甲山古墳は、直径29.5mの円丘をもつ円墳ないし前方後円墳である(第1図)。周溝覆土から円筒埴輪や・形象埴輪が出土し、墳頂部では2基の箱式石棺が確認されている。第1号棺からは人骨2体分と鉄刀2点が、第2号棺からは人骨4体分と鉄刀4点、鉄鏃87点、刀子1点、青銅製鋌6点、玉類(ガラス製勾玉9点、滑石製白玉2点、ガラス製小玉44点)が出土している(第2図)。調査の経緯や発掘調査の内容については、「つくば市甲山古墳の研究—調査報告編—」を参照されたい(筑波大学甲山古墳研究グループ2019)。

「考察編」にあたる本稿では、甲山古墳出土遺物の再整理から得られた知見や成果をまとめ、甲山古墳の位置づけを検討する。とくに、甲山古墳が筑波山麓における首長墓として位置づけられるかどうかは、首長系譜の議論とも関連し重要な論点である(滝沢2015)。甲山古墳は墳丘の大部分が失われ、墳丘形態と規模を確定させることができないため、墳丘のみで首長墓と判断することができない。そのため、本古墳の社会的、階層的な位置づけを議論するには、石棺



第1図 甲山古墳の墳丘と主体部



第2図 第2号棺の出土状況と遺物一覧

内出土遺物の詳細な検討が必要になるだろう。

また、甲山古墳ではひとつの石棺の中に複数体埋葬する様相が明らかとなっている。このような一石棺内複数埋葬は6世紀後葉以降の常総地域に顕著であるが、甲山古墳はその初現として認識できる可能性がある。本地域における埋葬の様相を明らかにするうえでも甲山古墳は好例であり、甲山古墳の細かな時期決定はもちろん、箱式石棺と埋葬方法の系譜関係についても整理する必要がある。

以上のような目的意識のもと、箱式石棺、鉄刀、鉄鏃、埴輪、玉類、埋葬方法について検討をおこない、甲山古墳の再評価を試みる。これらの学術情報が古墳時代地域史のさらなる理解につながれば、望外の喜びである。なお、本稿の執筆はI章～IV章・VI章を荒井啓汰が、V章を加藤千里が、VII章を滝沢誠が担当した。

I. 常総地域における導入期の箱式石棺

甲山古墳の箱式石棺は、第1・2号棺ともに、石橋充による分類のI類に該当し、古い段階の所産と判断できる(石橋1995)。ここでは、常総地域における導入期¹⁾の箱式石棺の検討を通して、その系譜的位置づけを検討したい。

1. 常総地域における導入期の箱式石棺

対象地域は古霞ヶ浦沿岸域、対象時期は5世紀中葉から6世紀前葉までである。実測図などから石棺の構造が分かる11基について検討をおこなった(第1表・第3図)。

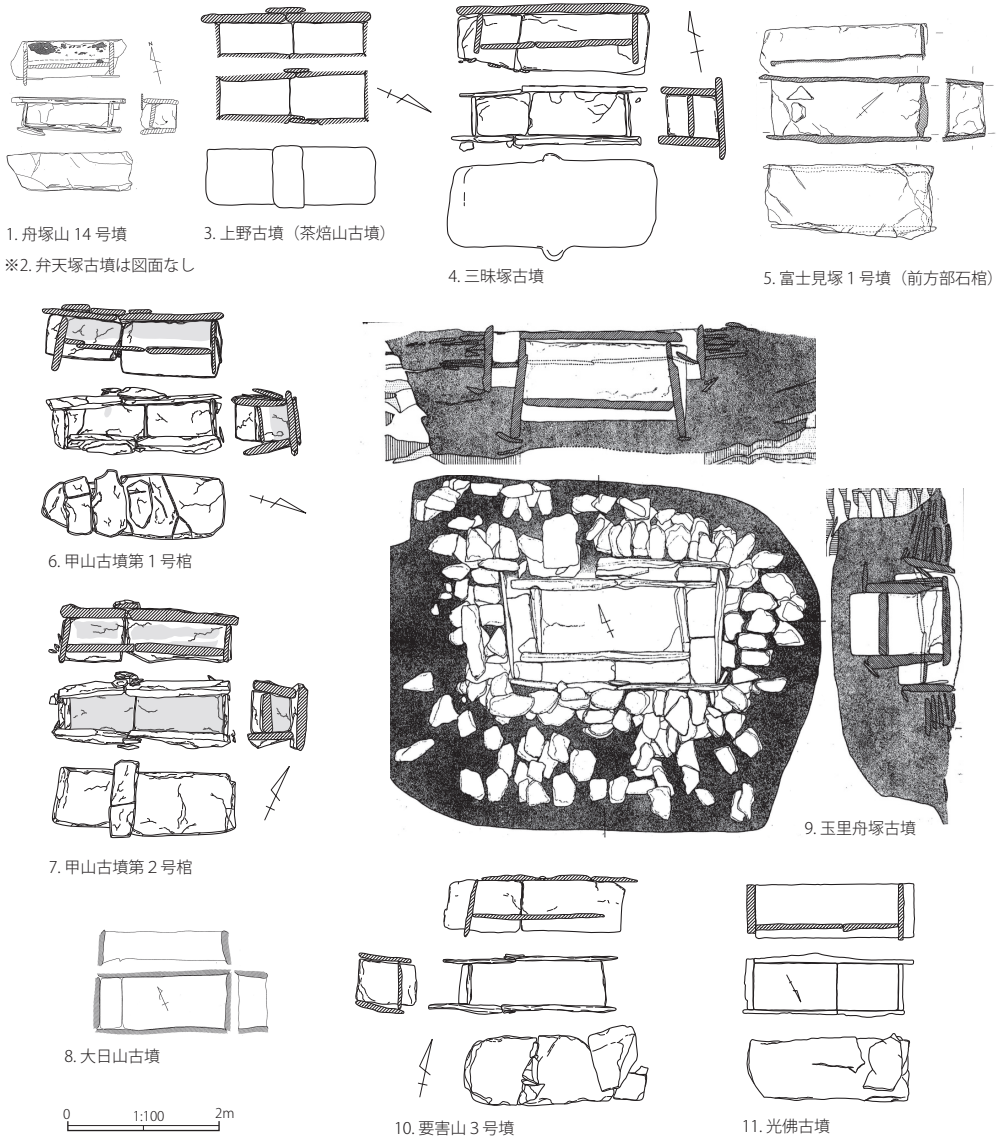
石棺の量方をみてみると、比較的まとまりがあることがわかる。とくに三味塚古墳、甲山古墳第1号棺、同第2号棺、要害山3号墳、光佛古墳は、内法の長さ2.0m前後、幅0.6mで非常に近似した値をとる。

石材の枚数は、側壁、床石、蓋石とも基本的に1～2枚で構成される。ただし、側壁や蓋石に関しては、主要石材を組み合わせた際の合わせ目に小型の石材を配置している例が多く見受けられる。

次に石材の組み合わせ方であるが、両側壁が小口壁を挟み込むA類と、1カ所のみ井桁状に組むB類が明確に認識できる。C類は図面上で判断できなかったものも含んでおり、D類は当該時期では光佛古墳の1例のみである。基本的に両側壁が小口壁を挟み込む構造であると言えるが、井桁状に組まれる事例も確実に存在していることがわかる。

構築位置については、基本的に墳頂部(後円部頂)である。ただし、構築位置が墳丘の中心にある(主軸上にのる)場合と、墳頂部の端部にある(主軸上にのらない)場合がある。三味塚古墳や舟塚古墳などの大型前方後円墳では主軸上に石棺が構築される傾向にあり、対して円墳では構築位置が墳頂端部に寄って斜面に近い場所に構築される傾向にある。

最後に構築方法であるが、基本的には墳丘盛土内に構築するタイプ(I類)である。5世紀後葉から6世紀初頭の事例では、明確な墓壇を確認できず(三味塚古墳、甲山古墳=b類)、



第3図 常総地域における導入期の箱式石棺

明確に墓壙を確認できるもの（舟塚古墳，要害山3号墳＝a類）は6世紀前葉以降である。

以上の検討から，古霞ヶ浦沿岸域における導入期の箱式石棺の特徴をまとめると，①石材の枚数は各壁1～2枚を基本とする，②石材の組み合わせ方は両側壁が小口壁を挟み込むものを基本とするが，井桁状に組む場合もある，③墳丘盛土内に構築し，初期のものは墓壙を伴わない，といった点が挙げられる。また，すべてに共通する特徴として，④側壁材はすべて横位に使用する，⑤床石の上に側壁がのるものではなく，すべて側壁で床石を挟み込む，といった点が挙げられる。これら5つの要素が導入期の箱式石棺を特徴づけており，全体的には比較的共通性が

第1表 常総地域における導入期の箱式石棺

| No. | 古墳 | 所在地 | 時期 | 墳丘 | 埋葬 人数 | 法量 (m) | | | 石材枚数 | | | 石材 使用 | 構築位置 | 構築 方法 | 主な副葬品 | | | | | 備考 | 文献 |
|-----|----------------------|--------------------|-------------------|----------|----------|--------|------|------|--------|--------|--------|----------|---------------|----------|--------|--------|--------|--------|--------------|---------------------|----|
| | | | | | | 長さ | 幅 | 高さ | 側 壁 | 床 石 | 蓋 石 | | | | 鉄 鍬 | 鉄 刀 | 馬 具 | 甲 冑 | 鏡 | | |
| 1 | 舟塚山 14 号墳 | 茨城県 石岡市 | 5c 中 ～ 5c 後 | ○ 11.5 | - | 1.07 | 0.29 | 0.33 | 1 | 1 | 1 | B | 墳頂部 (端部中心) | I- | | | | | | 小型。蓋 石に溝状 の加工 | 1 |
| 2 | 弁天塚古墳 | 茨城県 美浦村 | 5c 後 | ○ 52 | - | 2.4 | 0.9 | - | 2 | - | 2+ | A? | 墳頂部 | - | ○ | ○ | ○ | | | 2 | |
| 3 | 上野古墳 | 茨城県 八千代市 | 5c 後 | ●? | - | 1.90 | 0.98 | 0.41 | 2+ | 2 | 2+ | C? | 墳丘端部か | III? | ○ | ○ | ○ | ○ | | 3 | |
| 4 | 三味塚古墳 | 茨城県 行方市 | 5c 後 | ● 82 | 1 | 1.96 | 0.58 | 0.37 | 2 | 2 | 1 | A | 後背部頂 (中央) | Ib | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 蓋石に粗 雑な縄掛 突起 | 4 |
| 5 | 富士見塚 1 号墳 (前方部石棺) | 茨城県 かすみが うら市 | 5c 末 ～ 6c 初 | ● 80.2 | 2? | 1.98 | 0.73 | 0.45 | 1 | 1 | 1 | A | 前方部頂 (中央) | Ib? | ○ | ○ | | | | 5 | |
| 6 | 甲山古墳 第 1 号棺 | 茨城県 つくば市 | 6c 初 | ○? 29.5 | 2? | 1.97 | 0.53 | 0.38 | 2+ | 2 | 2+ | B | 墳頂部 (中央) | Ib | ○ | | | | | 6 | |
| 7 | 甲山古墳 第 2 号棺 | 茨城県 つくば市 | 6c 初 | ○? 29.5 | 4? | 2.1 | 0.56 | 0.36 | 2+ | 2 | 2+ | A | 墳頂部 (中央) | Ib | ○ | ○ | | | | 6 | |
| 8 | 風返大日山古墳 | 茨城県 かすみが うら市 | 6c 前 | ●帆 55 | 3? | 1.67 | 0.64 | 0.39 | 1 | 2 | - | C? | 墳頂部 (中央寄り) | - | ○ | ○ | ○ | | | 7,8 | |
| 9 | 舟塚古墳 | 茨城県 小美玉市 | 6c 前 | ● 72 | 1? | 2.05 | 0.89 | 0.82 | 1,2 | 1 | 1 | B | 後背部頂 (中央) | Ia | ○ | ○ | ○ | ○ | 「二重箱 式石棺」 | 9 | |
| 10 | 要害山 3 号墳 | 茨城県 石岡市 | 6c 前 | ○ 25? | - | 1.85 | 0.6 | 0.48 | 2 | 1 | 2+ | A | 墳頂部 (端部直交) | Ia | | | | | | 10 | |
| 11 | 光佛古墳 | 茨城県 美浦村 | 6c 前 | ● 50? | 2? | 1.91 | 0.61 | 0.52 | 1 | 2 | 2+ | D | くびれ部 中段 | I- | ○ | ○ | | | | 11 | |

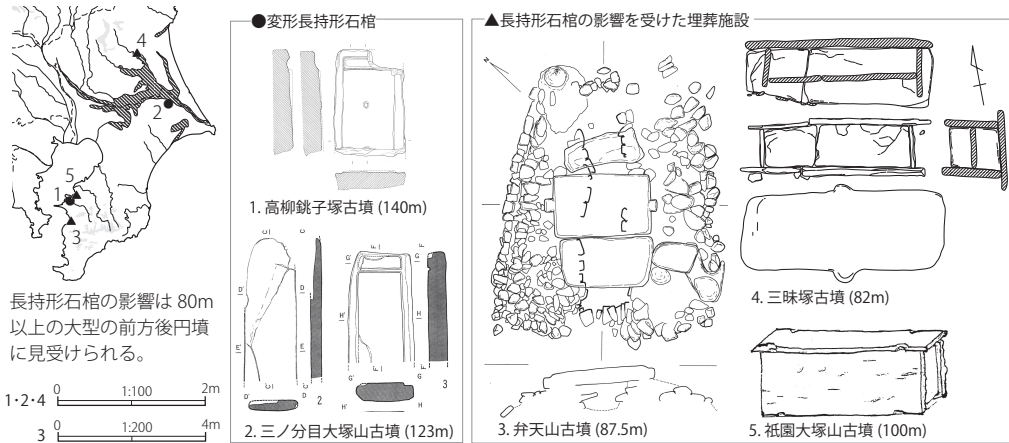
A: 両側壁材で小口材を挟み込む B: 4つの接点のうち1点が接する C: 4カ所で接する D: 互い違いに組む
I: 盛土内に構築 II: 地山直上に構築 III: 地山を掘り込んで構築 a: 明確に墓壇を設ける b: 明確な墓壇を設けない

高いと言えよう。

2. 常総地域における箱式石棺の系譜

常総地域の箱式石棺は、三味塚古墳の蓋石に粗雑な縄掛突起が作り出されていることから長持形石棺からの影響を受けているとされ、また、同じ古霞ヶ浦沿岸の千葉県三ノ分目大塚山古墳が長持形石棺をもつことから、両者の関連性が指摘されている(田中 1988, 黒澤 2005)。

そこで東関東における5世紀代の石棺・石室をみると、千葉県域の大型前方後円墳において、長持形石棺ないしその影響を受けた埋葬施設が展開していることがわかる(第4図)。高柳銚子塚古墳(白井 1995)と三ノ分目大塚山古墳(安藤ほか 1978)では長持形石棺が確認されている。また、祇園大塚山古墳の箱式石棺は長持形石棺からの影響が指摘されているほか(白井 2003)、弁天山古墳の竪穴式石室は蓋石に縄掛突起をもち、同じく長持形石棺の影響が考えられる(相山 1979)。時期的な様相をふまえると、5世紀前葉から中葉における長持形石棺(高柳銚子塚古墳、三ノ分目大塚山古墳)の影響を受けるかたちで、5世紀後葉の特異な埋葬施設(祇園大塚山古墳、弁天山古墳)が展開している。三味塚古墳も、この5世紀後葉における長持形石棺の影響を受けた埋葬施設の流れとして位置付けられるだろう。



第4図 長持形石棺の影響

また、5世紀後半には栃木県南部でも箱式石棺が認められるが（上野・安永 1989）、複数枚の板石を立位に用いて構築しており、常総地域のそれとは構造が異なっている。さらに茨城県西部でも5世紀代の箱式石棺の存在が指摘されている（岩間町史編さん委員会 2002, 黒澤 2005, 笠間市教育委員会 2008）。詳細不明な例が多いが、藤塚古墳の小型石棺や青柳1号墳の石棺が周溝内や墳丘裾に構築されていたことをふまえると、古霞ヶ浦沿岸の5世紀後葉の箱式石棺とは構築位置が異なっている。

このように常総地域の箱式石棺は、従来指摘されてきたとおり、千葉県域における長持形石棺の影響を受けている可能性が高い。しかしその特徴をふまえると、板石で構成され両側壁が小口石を挟み込む点は長持形石棺的であると言えるが、一方で側壁が床石を挟み込む構造は明らかに箱式石棺的な要素である。長持形石棺の影響を受けつつも、常総地域独自の埋葬施設として採用されているようである。

3. 古霞ヶ浦沿岸域における紐帯

当該期に箱式石棺を採用した古墳の規模をみると、首長墓クラスが多いことが指摘できる。比較的上位の首長が使用する埋葬施設のスタンダードとして、箱式石棺が採用されたものと思われる。

また、5世紀後葉の時点で、高浜入りの三味塚古墳、土浦入南岸の弁天塚古墳、鬼怒川流域の上野（茶焙山）古墳など比較的広範囲に類似した箱式石棺が展開しており、いずれかの古墳から伝播するかたちで採用されているわけではない。これらの箱式石棺の法量や構造には共通性が高いことを指摘したが、その背景には古霞ヶ浦を介した首長同士の密な情報共有も想定できるかもしれない。中期には舟塚山古墳と三ノ分目大塚山古墳の墳丘が相似形をとり、内海世界の紐帯が指摘されているが（田中 2012）、内海の交流、とくに高浜入と香取海周辺の交流を

基軸として、長持形石棺の情報がもたらされた可能性がある。いずれにせよ、甲山古墳の第1・2号棺もこの首長同士の紐帯のなかに位置付けられるだろう。(荒井啓汰)

Ⅱ．茎元挟りを有する鉄刀について

甲山古墳では、第1号棺と第2号棺から計6本の鉄刀が出土したが、うち2本には茎元に長方形の削り込み（以下「茎元挟り」²⁾）が認められた。この茎元挟りは、護拳帯を伴う伝統的倭装大刀と関連があるとされてきたが、その性格をめぐってはあまり検討がなされてこなかった。そこで、茎元挟りをもつ鉄刀の諸要素をまとめ、その性格について基礎的な検討を行いたい。

1. 先行研究

大和久震平は、七廻り鏡塚古墳出土の刀装具の観察の中で、把木の長方形の小孔が「三輪玉を装着した把手の差し込み孔とみられる」（大和久 1969：75頁）としたが、そこでは鉄刀把部そのものへの言及はなされていない。大和久はその後、桑57号墳の鉄刀について茎の削り込みと把木の穴の関係について言及し、茎尻のそぎ落とし（隅切・隅挟）とともに、三輪玉が取りつく護拳帯を差し込む部分であると想定した（大和久 1972）。把装具の検討を行った置田雅明は、茎部の切り欠きが長方形孔の用途と関連すると指摘した（置田 1985）。また、三宅博士も同様の見解を提示しているほか、長大なものが多く儀仗的性格がつよいと評価している（三宅 1988）。

近年では、鈴木一有が茎元挟りをもつ鉄刀について触れている（鈴木 2012）。鈴木は、①七廻り鏡塚古墳や藤ノ木古墳など三輪玉を用いる装飾大刀に散見され、勾革を伴う拵えと関連をもつこと、②初現は中期前半で、中期中葉以降増加すること、③三輪玉の初現も茎元挟りの増加と重なるが、必ずしも茎元挟りに三輪玉が伴うとは限らない、などの特徴をまとめているが、これらはおおむね一般的な理解であるといえる。

茎元に長方形の削り込みをもつ鉄刀は、勾金や勾革などの護拳帯（「勾帯」と呼称）を伴う伝統的な倭装大刀と関連が深いことが理解される。裏を返せば、茎元挟りを有する鉄刀とその古墳の位置づけを検討することによって、伝統的な倭装大刀の社会的役割を考察することができよう。

2. 茎元挟りを有する鉄刀の諸要素

6世紀中葉以前の茎元挟りを有する鉄刀について、法量、茎尻形式、把部の構造、付属物などから、その特徴を把握したい（第2表・第5図）。法量をみると、全長100cm以上、刃部長80cm以上が多く、全体的に長大である。それに伴い、刃部最大幅も4cm前後と幅広いものが目立つ。栃木県桑57号墳例は残存長121.6cmと長大である。

茎尻の形状に統一性は認められない。大和久震平は隅切・隅挟茎尻と茎元挟りが対応する可能性を指摘したが（大和久 1972）、必ずしも隅切・隅挟茎尻というわけではなく、一文字茎尻

筑波大学甲山古墳研究グループ

第2表 茎元抉りをもつ鉄刀（～後期前半）

| | 事例 | 所在地 | 墳丘 | 残存長 | 刃長 | 刃幅 | 茎尻 | 特徴 | 備考 | 時期 | 文献 |
|----|--------------------|-----|-------|---------|--------|-------|------|--|----------|----------------|----|
| 1 | 魚蓋沼1号墳(1号棺) | 宮城 | ○22 | 106 | 88 | 4.0 | 隅抉 | | | | 1 |
| 2 | 甲山古墳第1号棺 | 茨城 | ○?30 | 109.0 | 88.3 | 4.3 | 一文字 | | 2本中最長 | MT15 | 2 |
| 3 | 甲山古墳第2号棺 | 茨城 | ○?30 | 101.0 | 83.2 | 3.8 | 隅抉 | | 4本中最長 | MT15 | 2 |
| 4 | 七廻り鏡塚古墳 (舟形木棺) | 栃木 | ○30 | 107.6 | 87.4 | 4.3 | 一文字 | 楔形把頭、落とし込み、茎元抉りに対応する位置の把木に長方形孔がある | 把完存 | MT15 | 3 |
| 5 | 七廻り鏡塚古墳 (組合せ木棺) | 栃木 | ○30 | (116.7) | 99.1 | 4.2 | 一文字? | 三輪玉8点が共存 | | MT15 | 3 |
| 6 | 桑57号墳 | 栃木 | ●丸35 | (121.6) | (92.3) | 3.0 | 隅抉 | 目釘2 | 3本中最長 | 5c後 | 4 |
| 7 | 磯岡北3号墳 | 栃木 | ○21 | 101.3 | 84.7 | 3.2 | 隅抉 | 目釘2、茎は落とし込みか、「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」で密にまかれている | 3本中最長か | TK208新 | 5 |
| 8 | 持塚1号墳 | 千葉 | ○40 | 107.8 | 90.5 | 3.7 | 隅抉 | 目釘2、把木が皮革で包まれている、把縁装具の両面に5mmほどの切り込みがある | 把部が良好に残存 | TK23 | 6 |
| 9 | 吉高浅間山古墳(主1) | 千葉 | ○25 | (96.1) | (79.4) | 3.7 | 一文字 | 目釘3 | | TK23 | 7 |
| 10 | 吉高浅間山古墳(主3) | 千葉 | ○25 | 103.8 | 85.7 | 3.8 | 一文字 | 目釘2 | | TK23 | 7 |
| 11 | 吉高浅間山古墳(主5) | 千葉 | ○25 | 92.6 | 74.8 | 3.6 | 一文字 | 目釘2 | | TK208 | 7 |
| 12 | 八幡塚古墳 | 東京 | ○丸33 | (104) | 88.8 | 3.9 | - | 目釘1、幅20cmの踵をもつ | 2本中最長 | TK47 | 8 |
| 13 | 妙前大塚古墳 | 長野 | ○29.5 | 108 | 84 | 3.4 | 一文字 | 目釘2、鞘と把に杉を用い、漆塗か | 4本中最長 | 5c中 | 9 |
| 14 | 愛野向山12号墳 | 静岡 | ○10 | (79.6) | (63.2) | 3.6 | 隅切 | 目釘2 | | TK47 | 10 |
| 15 | 小谷13号墳 | 三重 | ○20 | 111.1 | 89.4 | 3.6 | 隅抉 | 目釘2、岡から30cm下は木質が見られない | 刀剣類中最長 | TK208 | 11 |
| 16 | 東条1号墳 | 三重 | ○11 | 112.7 | 91.4 | 4.3 | 一文字 | 振環頭、落とし込み、把間は「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」上にたすき掛け、組紐巻 | 把部が良好に残存 | TK10古 | 12 |
| 17 | おじょか古墳 | 三重 | - | 84.2 | 64.8 | 3.15 | 隅抉 | 幅4.4cmの把縁材に二枚合わせの把間材を差し込む。「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」 | 刀剣類中最長 | ON46- TK208 | 13 |
| 18 | 稲穂オオヤチB4号墳 | 富山 | ●28 | 102.4 | 79.2 | 4.4 | 隅抉 | 目釘2 | | 5c後 | 14 |
| 19 | 黒田長山4号墳 | 滋賀 | ○17 | 97.7 | 81.5 | 4.1 | 栗尻 | 目釘2、糸巻きか、把縁装具は別造りか | | TK23 | 15 |
| 20 | 新沢千塚114号墳 | 奈良 | ○14 | 77.8 | 64.9 | 2.9 | 一文字 | | | TK47 | 16 |
| 21 | 新沢千塚206号墳 | 奈良 | ○20 | 110 | 89 | 4.5 | 隅抉 | | | MT15 | 16 |
| 22 | 新沢千塚255号墳 | 奈良 | ○16 | 97.8 | 81.3 | 3.3 | 隅切 | 茎元抉のそばに12.5×6mmの長方形孔があく | | TK23-TK47 | 16 |
| 23 | 新沢千塚333号墳 | 奈良 | ○17 | 98.3 | 79.3 | 4.5 | 隅抉 | | | TK10- | 16 |
| 24 | 後出3号墳 | 奈良 | ○13 | 89.0 | 71.5 | 4.0 | 隅抉 | | | TK23 | 17 |
| 25 | 峯ヶ塚古墳(大刀1) | 大阪 | ●96 | 108.5 | 89.75 | 3.7 | 一文字 | 楔形・振り環頭、把間は2種紐巻、鞘部外装は木製か鹿角装鞘口 | | MT15 | 18 |
| 26 | 峯ヶ塚古墳(大刀4) | 大阪 | ●96 | (69.6) | (49.7) | 3.8 | 一文字 | 楔形・振り環頭、把間は2種紐巻、鞘部外装は木製紐張、魚佩が伴う? | | MT15 | 18 |
| 27 | 峯ヶ塚古墳(大刀8) | 大阪 | ●96 | 110.7 | (89.1) | 3.8 | 一文字 | 把頭形状不明、把間は紐巻 | | MT15 | 18 |
| 28 | 峯ヶ塚古墳(一括a) | 大阪 | ●96 | (107.3) | 87.5 | 3.85 | 一文字 | 楔形・振り環頭、把間は2種紐巻、鞘部外装は木製紐張 | | MT15 | 18 |
| 29 | 峯ヶ塚古墳(一括b) | 大阪 | ●96 | (109) | (88) | (4.5) | 一文字 | 振り環頭、把間は紐巻、鞘部外装は木製紐張 | | MT15 | 18 |
| 30 | 峯ヶ塚古墳(一括c) | 大阪 | ●96 | (80) | (4.5) | (4.5) | 一文字 | 把頭形状不明、把間は紐巻 | | MT15 | 18 |
| 31 | 大谷古墳(Wc1) | 和歌山 | ●70 | (72.7) | (60.3) | 4.3 | 一文字 | 目釘3 | 刀類中最長か | 5c後 | 19 |
| 32 | 大谷古墳(Wc6) | 和歌山 | ●70 | (43.2) | (29.3) | 2.9 | 隅切 | 目釘2 | | 5c後 | 19 |
| 33 | 梅田1号墳 | 兵庫 | ○28 | 99.3 | 80.3 | 3.0 | 隅抉 | 目釘2 | 2本中最長 | 中期前半 | 20 |
| 34 | 塚ノ山1号墳(M1) | 兵庫 | ○17 | 87.4 | 70.4 | 2.8 | 一文字 | 鹿角装A類、把縁突起反対側に振り込み、「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」 | 把A類の事例 | MT15- TK10 | 21 |
| 35 | 塚ノ山1号墳(M2) | 兵庫 | ○17 | 99.5 | 81.1 | 4.0 | 一文字 | 目釘3、鹿角装把装具、「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」で密にまかれている | 2本中最長 | MT15- TK10 | 21 |
| 36 | 天狗山古墳 | 岡山 | ●丸57 | 97 | - | - | 一文字 | 鹿角製の鞘口 | | 5c後 | 22 |
| 37 | 三輪山6号墳 | 岡山 | ○15 | (118.0) | 94.8 | 4.8 | 一文字 | 目釘3 | | MT15か | 23 |
| 38 | 空長2号墳 | 広島 | ○9 | 94 | 78.2 | 3.9 | 隅切 | 目釘2、把間は紐巻きだが詳細不明 | | TK208 | 24 |
| 39 | 城ノ下1号墳 | 広島 | ○21 | 92.4 | 75.1 | 2.8 | 一文字 | 目釘2 | 3本中最長 | TK208 | 25 |
| 40 | 倭文6号墳 | 鳥取 | ○13 | 107.4 | (87.1) | 4.8 | 一文字 | 目釘3 | 2本中最長 | 中期末葉 | 26 |
| 41 | 古曾志大谷1号墳 | 高根 | ■45.5 | 98.2 | 80.5 | 3.5 | 一文字 | 目釘1? | | (TK47?) | 27 |
| 42 | 西1号墳 | 高根 | ○? | 108.3 | 90.9 | 3.6 | 隅抉 | | | TK23-TK47 | 28 |
| 43 | 馬込山A1号墳 | 高根 | □18.5 | (28.8) | (16.5) | 2.8 | 隅抉 | | | TK23-TK47 | 28 |
| 44 | 正龍3号墳 | 福岡 | ●33 | (103.8) | 86.4 | 3.7 | 隅抉 | やや内反り、目釘2 | 2本中最長 | MT15-TK10 | 29 |
| 45 | 幣旗邸1号墳 | 大分 | ○20 | 98.1 | 80.3 | 1.0 | 一文字 | 目釘5? | | 中期末葉 | 30 |
| 46 | マロ塚古墳 | 熊本 | ○15 | (98.2) | - | 3.2 | - | | | 5c後 | 31 |
| 47 | 江田船山古墳 | 熊本 | ●62 | 90.9 | 85.3 | 4.0 | - | 銀象嵌銘文、踵本孔は貫通していない | | 5c末 | 32 |



第5図 茎元挟りをもつ鉄刀の比較

も一定数確認できる。大阪府峯ヶ塚古墳例は、茎元挟りを伴う6点すべてが一文字茎尻である。

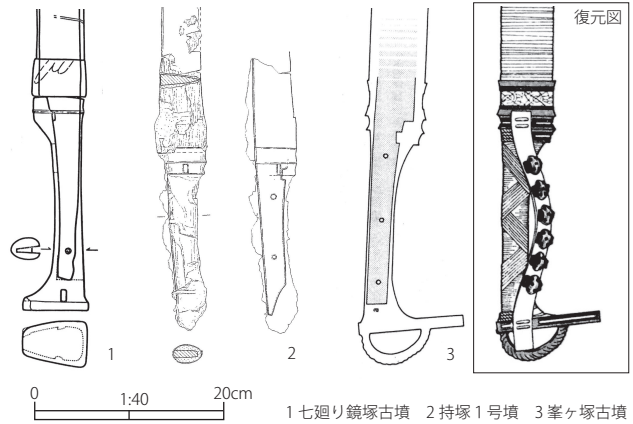
把部の構造を把握できる事例は限定されているが、把木が残存する例をみると、楔形把頭（B類）が多く確認できる（置田 1985, 山内 2003）。大阪府峯ヶ塚古墳例では、茎元挟りを伴う6点すべてが楔形把頭（B類）であるのに対し、その他の鉄刀は把縁突起をもつA類であり、明確に差別化されている。持塚1号墳例と倭文6号墳例は、把頭形状が判然としないものの、残存する把縁装具に明確な突起が認められないことから、B類の可能性が高い（第6図）。

把間は糸巻きが多く、特に2本の芯をまとめて1本の糸のようにする例が散見される（磯岡北3号墳、おじよか古墳など）。これは沢田むつ代が「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」とした構造である（沢田 2008）。また、持塚1号墳例は把木が皮革で巻かれている稀有な例である。

把部に金属製の付属品が伴うものは少ない。峯ヶ塚古墳や七廻り鏡塚古墳例で金銅製三輪玉が伴出し、勾帯に装着すると思われるが、それ以外の古墳では認められない。基本的には、金

属製の付属品は伴わないことがうかがえる。また、峯ヶ塚古墳や東条1号墳例には振り環が付属するが、これも一部の事例に限定されている。

以上のように、茎元挟りをもつ鉄刀の把部は、金属製の付属品や振り環を伴うものは一部で、楔形把頭（B類）が多くみられることがわかる。しかし全体的に装具に強い統一性はみられず、勾帯を有する鉄刀にはバリエーションが認められるといえる。



第6図 茎元挟りをもつ鉄刀の把部外装

3. 茎元挟りを有する鉄刀の位置づけ

茎元挟りをもつ鉄刀の要素をまとめたが、勾帯をもつ鉄刀は基本的に全長100cm以上の長大なものが多いことが確認できた。刃部長が80cm以上あり、形態としては直刀であるため、これらは佩用した状態での抜刀は難しい。基本的には儀礼用の刀として理解できるだろう。興味深いのは、刀剣類を複数副葬する場合、その中で最も長いものに勾革を伴う鉄刀が採用されていることである。儀礼用の倭装大刀が、他とは差別化されていたことがうかがえる。

一方で、これらの出土した古墳の規模とランクをみると、峯ヶ塚古墳のような最上位クラスの古墳がある一方で、磯岡北3号墳や空長1号墳のように、小規模でランクの低い古墳も多く含まれている。その中間的な地方の首長墓クラスもみられるため（古曾志大谷1号墳など）、勾革を伴う鉄刀は、いずれのランクの被葬者であっても所有可能であったと思われる。伝統的倭装大刀は、必ずしも威信財や身分表象財として機能したとは言い難い。

以上、勾革を伴う鉄刀の特徴をまとめると、次のようになる。①全長100cm以上の長大なものも多く、一埋葬施設内において最も長いものにみられる、②小規模古墳から最上位の古墳までひろい階層でみられる、③茎尻形式、把部の構造、付属物に統一性はみられない。

4. 伝統的倭装大刀の社会的機能をめぐる課題

勾帯を伴う伝統的倭装大刀は、法量や後世の使用法から、その多くが非実戦用であると思われる。これらは下位層の首長も所持することがあるうえ、装飾性の低い例もみられ、必ずしも身分表象財としての役割のみが想定されるわけではない。勾帯を伴う大刀の中には、実戦用でも身分表象用でもない、儀礼的利用がなされた例が含まれると考えるべきである。

ただし、それらがいかなる社会的役割を果たしたかについては明確でなく、今後の課題で

ある³⁾。検討にあたっては、茎元挟りをもつ鉄刀の位置づけをはじめ、三輪玉を伴う鉄刀の様相、隅切・隅挟茎尻の鉄刀、鉤本孔をもつ鉄刀との関係性などを総体的に捉える必要があるだろう。甲山古墳でも、鉤本孔をもつ鉄刀が茎元挟りをもつ鉄刀と対置されている状況が示唆的である。さらに、大刀形埴輪との関係性も興味深い（白石 1993 など）。大刀形埴輪では基本的に勾帯を伴う楔形把頭の大刀が表現され、それ以外の形状はほとんどみられない。勾帯を伴う楔形把頭の大刀に、何らかの象徴性が付与されていたことがうかがえる。伝統的倭装大刀の社会的機能に言及するにあたっては、単に「威信財」という用語を使用するのではなく（内山 2000）、身分表象用や葬送儀礼用⁴⁾など、多様な利用の在り方を想定して検討する必要がある。（荒井啓汰）

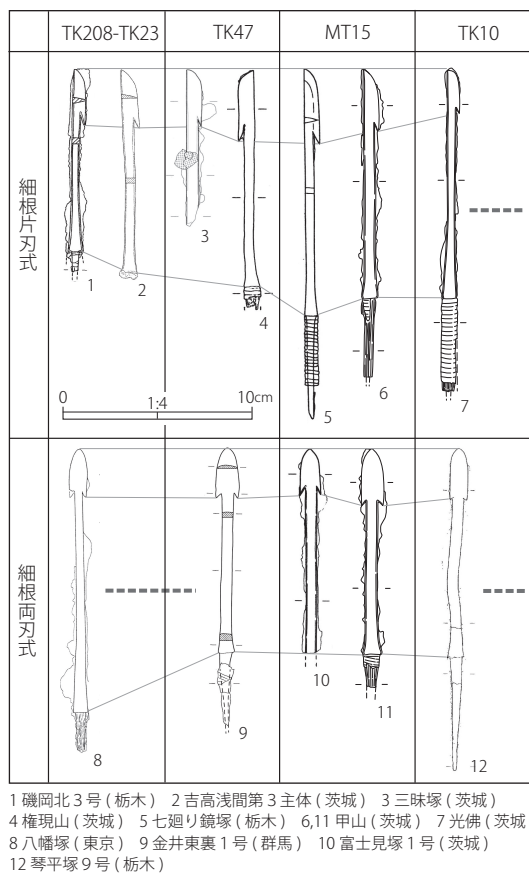
Ⅲ．鉄鏃の時期と構成

1. 鉄鏃の時期的位置づけ

鉄鏃の時期については調査報告編でも触れたが、ここでは両刃式・片刃式細根系鏃を中心に、周辺地域の出土鉄鏃との比較を通して再度時期的な位置づけを整理したい（第7図）。

後期前半における長頸鏃の変化は、全体的には逆刺の短化として理解されるが（杉山 1988）、この時期の詳細な変遷観は、遠江・駿河での整理が参考になる（大谷 2004）。当該地域では片刃式はTK216~TK208 型式段階で長頸化し、TK23 ~ TK47 型式段階では鏃身部の小型化が特徴となる。とくにこの段階では鏃身長 2.5~3.5cm、頸部長 8 ~ 9cm、逆刺長 5mm 以上でほぼ同一の規格を有する。その後は逆刺の短化が進み、鏃身関が直角関化するという。よって、5 世紀後葉から 6 世紀前葉における鉄鏃の変化の方向性は鏃身部の小型化と逆刺の短化と捉えられ、類似した状況が関東地方においても追認できればよい。加えて、甲山古墳例は片刃式・両刃式ともに逆刺が伴うが、関東地方において逆刺がどの段階で消失するかを明らかにできれば、甲山古墳例の下限を決定することができる

5)。



1 磯岡北3号(栃木) 2 吉高浅間第3主体(茨城) 3 三昧塚(茨城)
4 権現山(茨城) 5 七廻り鏡塚(栃木) 6,11 甲山(茨城) 7 光佛(茨城)
8 八幡塚(東京) 9 金井東裏1号(群馬) 10 富士見塚1号(茨城)
12 琴平塚9号(栃木)

第7図 鉄鏃の変遷

細根片刃式 TK208 ～ TK23 型式段階では比較的頸部が短い。栃木県磯岡北 3 号墳では、頸部長 7.0～8.5cm、逆刺長は 4 ～ 7mm 程度である。TK47 型式段階にあたる茨城県権現山古墳では、鍬身長 3.2 ～ 3.7cm、頸部長 8.0 ～ 8.4cm、逆刺長 5 ～ 7mm 程度であり、これは静岡県域の同時期の鉄鍬と同様の法量である。その後、MT15 型式段階にかけて頸部が長大化し、相対的に刃部長の比率が小さくなる。栃木県七廻り鏡塚古墳や甲山古墳の例は頸部長 9cm 以上が大半を占める。

TK47 型式段階以降、徐々に逆刺が短化し、消失する。MT15 型式段階の群馬県柳瀬二子塚古墳や、MT15 ～ TK10 型式段階が想定される栃木県中山古墳では逆刺が確認できる。中山古墳例は 2mm 程度の浅い逆刺である。茨城県域の事例は乏しいが、光佛古墳では逆刺 2 ～ 4mm 程度の浅い逆刺が確認でき、刃部と頸部の長さをふまえると甲山古墳よりも新しい可能性がある。

細根両刃式 TK47 型式段階以降、類似した法量を示す。群馬県金井東裏 2 号墳は FA 降下直前に築造されており時期決定の材料となるが、出土鍬の法量は甲山古墳例と類似する。MT15 型式段階の富士見塚 1 号墳でも逆刺が比較的深い細根両刃式が出土している。

逆刺の消失に注目すると、ふくらが張る柳葉形の細根両刃式では、栃木県琴平塚 9 号墳例が 1 ～ 2mm 程度の非常に浅い逆刺を有し、ほとんど直角関に近い。内彎楕円形鏡板付轡と土師器坏の年代観から TK10 型式併行期が想定される。TK10 型式期古段階が想定される栃木県飯塚 33 号墳では、鍬身形状は三角形を呈するものの逆刺を有する。一方で、TK10 型式期新段階が想定される飯塚 42 号墳では細根両刃式はすべて直角関となっており、逆刺をもたない。このことから、逆刺の消失は TK10 型式期のあいだに起こっているものと思われる。

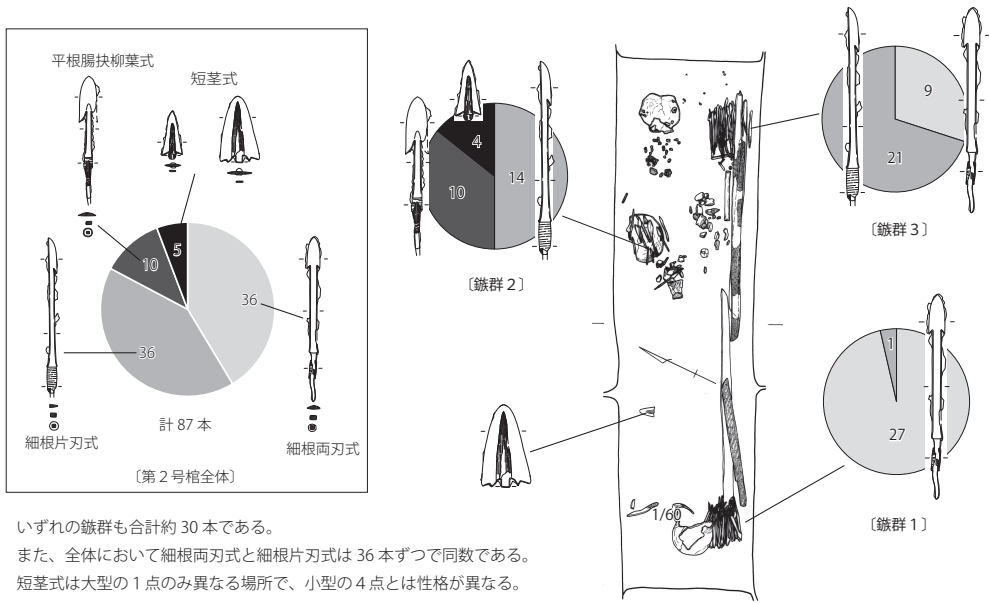
茨城県域とその周辺地域において、逆刺の消失は TK10 型式段階のあいだに求められ、これが甲山古墳例の下限となる。逆刺の深さから、甲山古墳例は TK10 型式段階よりも古相を呈する。一方で、TK47 型式段階の権現山古墳例と比較すると頸部が長く、また逆刺も短い。以上から、甲山古墳例は MT15 型式段階に位置付けるのが妥当である。

2. 鉄鍬の構成

鉄鍬の分析視角として、副葬時の扱われ方や祖形から機能を分類する方法が進められ、鉄鍬の形態と性格の対応が明らかとなってきた。鈴木一有は、中期の鉄鍬について副葬時の扱われ方と形態に相関関係があることを指摘した（鈴木 1999）。田村隆太郎も、静岡県における副葬時の鍬群からその性格を検討している（田村 2003）。このような分析は、埋葬時の状態を良好に留める甲山古墳の例でも有効であり、関東地方における後期初頭の古墳で鍬の形態と機能がどのように対応していたかを理解する好例となるだろう。

甲山古墳第 2 号棺では、細根両刃式 36 点、細根片刃式 36 点、平根腸袂柳葉式 10 点、短茎式 5 点の、計 87 点が出土している。これらは石棺内から 4 箇所に分かれて出土している。

全体的には、細根両刃式と細根片刃式で大半を占め、広根系の鍬は少ない（第 8 図）。この構成は、一般的にみられる「多数の細身鍬＋少数の広身鍬」という構成に符合するものである。



第 8 図 甲山古墳第 2 号棺の鉄鏃組成

| | | | |
|----|-----------|---------|-----------|
| 鏃束 | 鏃束を成さない | ←————→ | 鏃束を成す |
| 数量 | 少数副葬 | ←————→ | 多数副葬 |
| 文献 | 「上差矢」「野矢」 | | 「征矢」 |
| 形態 | 茎部 | 無茎・短茎 | 有茎 |
| | 頸部 | なし | あり |
| | 鏃身部 | 平根系 | 平根系 |
| 着装 | 根挟み | 茎差し込み | 茎差し込み |
| 事例 | 短茎式 | 平根腸扶柳葉式 | 細根両刃式・片刃式 |
| | | | |

1,3,4,7,8 甲山古墳 2,5 三味塚古墳 6 江子田金環塚古墳

甲山古墳の事例を基礎とし、当該時期の常総地域の情報を加えて作成

第 9 図 鉄鏃の形態と扱われ方の関係性

(田村 2003)。これは、中世における実戦用の「征矢」と、儀礼・狩猟用の「野矢」の関係に類似すると理解されることが多い(松木 2001)。ただし、松木が指摘したこの関係はひとつの鏃束における組成にみられるものであり、甲山古墳においては、石棺内全体ではこの関係が認められるものの、鏃束同士は異なった様相を示している。

鏃群単位で把握すると、基本的には1つの鏃群は30本程度で構成されていることがわかる(第8図)。そのうち、鏃群1と鏃群3は鏃束をなしており、それぞれすべて細根系の鉄鏃で占められている。一方、鏃群2は細根系と平根系の双方から構成され、平根腸挟柳葉式と短茎式はやや散在したあり方を示す。さらに、重挟をもつ大型の短茎式鉄鏃は単体での出土であり、その性格が他とは異なることが想定される。

甲山古墳の情報を基礎として、常総地域における鉄鏃の鏃身形状と数量、出土状況の関係を整理すると、第9図ようになる。細根系鏃は、基本的に両刃式・片刃式とも鏃束として多量に副葬される。甲山古墳第2号棺や権現山古墳では、ひとつの鏃束が30本程度の鏃で構成される。一方で無茎・短茎鏃は少数のみ副葬され、それらのみでは鏃束をなさない。甲山古墳では単体で出土するが、細根系鏃の鏃束に伴う場合(鴫崎天神台3号墳)もあり、後者は「野矢」のような位置づけも想定される(松木 2001)。無茎・短茎鏃は矢柄との接続に根挟を用い、構造上でも細根系と大きく異なっている(川畑 2015)。有頸の平根系鏃は、細根系鏃(多数、鏃束をなす)と、無茎・短茎鏃(少数、単一型式で鏃束をなさない)の中間として位置付けられる。甲山古墳も含め、幅の広い刃部をもつ有頸平根系鏃は、少数副葬されることが多い(吉高浅間古墳第4主体など)。一方で、幅の狭い刃部をもつ有頸平根系鏃は、鏃束として多数副葬されることがあり、両刃式細根系鏃の在り方と近い(江古田金環塚古墳など)。ただしこのような平根系鏃では、金井東裏遺跡出土例のように頸部に鏃が取りつくことが確認された事例もあり、吉高浅間古墳第3主体出土例でもその可能性が指摘されている。実戦用というよりも、鏃矢としての機能が想定される。

常総地域においても、鏃の多様な形態と機能(扱われ方)のあいだに、ある程度の相関があることが明らかとなった。基本的には先学の指摘と符合する結果であるが、このことは鏃が単に実戦用の武器としてのみ機能したのではなく、それ以外の様々な社会的意味を付与されていたことを示す(鈴木 2000)。

3. 葬送の中の矢鏃

鏃束としてではなく、単体で意図的に配置されたと思われる鉄鏃は、埋葬時における「利用」の可能性を示唆する。甲山古墳では、大型短茎鏃が石棺に直交する方向で1点副葬されているが、石棺幅は38cmであるので、矢柄を伴っては棺に入りきらない。この鏃に矢柄は装着されず、根挟のみが伴っていたことがうかがえる。矢柄との接続に根挟を伴う無茎・短茎鏃は、その流通と副葬時に矢柄が伴っていない可能性が指摘されているが(川畑 2015)、同様の事例は千葉県台の内古墳や同生浜2号墳でも確認されている。甲山古墳ではこの大型短茎鏃と刀子のみが

切先を北に向けており、埋葬時における意図的な配置も想定される。同様に、5世紀後葉の栃木県本村2号墳では、細根片刃式鏃が石棺に直交して副葬されている（宇都宮市教委 2004）。これも矢柄を伴っているが、茎には木質と口巻きが残存しているため、矢柄は途中で折り取られた可能性がある⁶⁾。これらは他の矢鏃と異なる副葬の方向をもち、意図的な配置を示唆する。

このように、たんに矢鏃を副葬するのではなく、葬送・埋葬時に何らかの目的で意図的に配置された可能性がある。これらの鏃は、単に被葬者の軍事的性格の表出として片づけるのではなく、葬送のコンテキストの中で矢鏃を「利用」した社会的行為が存在したと考える方が自然である。鉄鏃に社会的意味が付与されていたことは上述の通りであるが、鉄鏃の多くは男性に伴うという指摘（清家 2010、ペトラ 2014）も含め、矢鏃の社会的利用の観点も必要であると思われる⁷⁾。（荒井啓汰）

Ⅳ. 筑波山麓における甲山古墳出土埴輪の位置づけ

甲山古墳の墳丘からは円筒埴輪と形象埴輪が出土している。埴輪は周辺古墳との関係性を比較するために有効な資料であるが、ここでは筑波山系の埴輪の変遷と流通の問題に触れ、甲山古墳出土埴輪の位置づけを検討したい。

1. 時期的位置づけ—沼田八幡塚古墳との前後関係—

甲山古墳の円筒埴輪は、形態、調整、焼成から川西編年のⅤ期に位置付けられる（川西 1978）。しかし、その中で細かな時期決定は難しい。これは日高慎が指摘するように、常総地域における6世紀代の円筒埴輪では編年の基準が見出せないことに起因する（日高 2003）。しかし、筑波山麓における古墳の時期的・階層的关系性を考えるうえで、円筒埴輪の検討は必要である。ここでは主に甲山古墳例と沼田八幡塚古墳例との比較を通じ、相対的な時期の前後関係をみていきたい。

当該地域における埴輪の変遷は、塩谷修の検討によるところが大きい（塩谷 1997）。塩谷は突帯の幅が細く高いものから、幅広く低いものへと変化することを指摘し、基本的な変遷観を提示した。日高慎は、先述のように編年の指標を見出すのが難しいとしつつも、塩谷による断面形態の変遷観の有効性を認めている（日高 2003）。また篠田泰輔は、玉里古墳群において、突帯が扁平化する傾向を数値化して示した（篠田 2005）。このように、当該時期の埴輪の前後関係を論じるには突帯の分析が有効であり、全体的には突帯が高いものから低いものへ、断面形態が台形から三角形・山形へと推移する傾向にある。ただし、これも一律に変遷するわけではなく、例えば6世紀後葉でも台形の断面形態を有することがあるし、断面三角形であっても突帯の高さが比較的高い場合がある。これは、突帯の高さや形態が、埴輪自体の大きさ、粘土紐の量、貼付する際の指の当て方とその強さなど製作時の様々な要因によって規定されるためであり、広域的に一律の変遷を述べることは難しい。むしろマイクロなレベルでの推移をみる

ため、「筑波山系の埴輪」（石橋 2004）において突帯の時期的な要素を抽出し、その前後関係を検討したい。

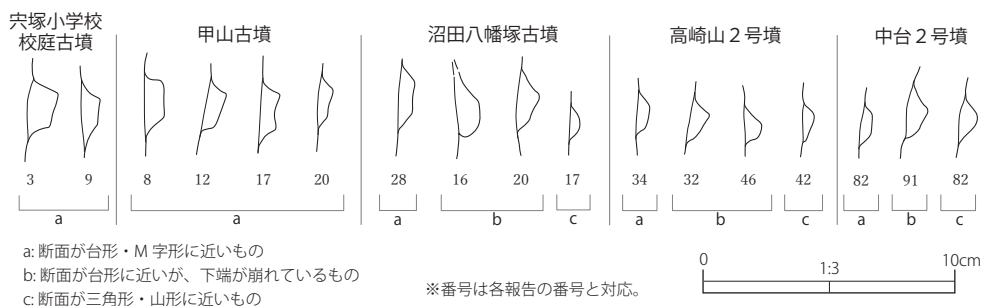
甲山古墳は、直径 29.5m の円丘をもつ円墳ないし前方後円墳である。甲山古墳出土円筒埴輪は、断面形態が台形ないし M 字形のものが多く、三角形のものは認められない。これは親指・人差し指・中指をそれぞれ突帯の上面・端面・下面に当て、ナデにより調整するものである。突帯の高さは平均 7.1mm である。

沼田八幡塚古墳は全長 94m の前方後円墳で、筑波山南麓においては最大規模である。円筒埴輪の突帯は、台形のものも認められるが、下端が低く台形が崩れたものや三角形のものが比較的多く認められる。これは突帯上面を下面よりも強くナデつけることで形成される。なお、内面ハケ調整が認められる個体がある。

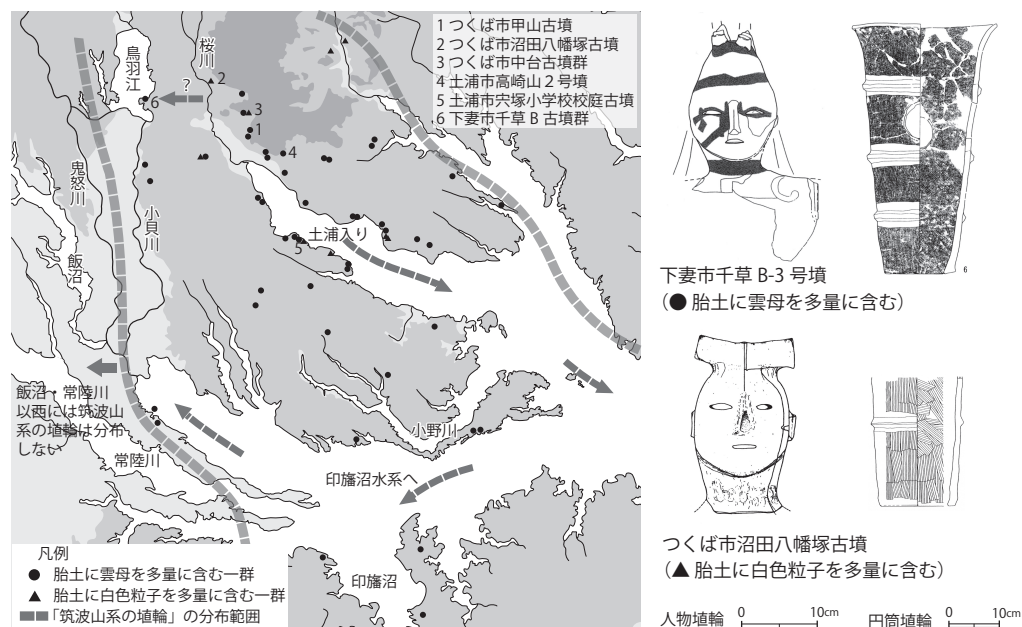
宍塚小学校校庭古墳例は、甲山古墳のものと類似する。突帯の断面は台形で、その高さは 8mm ~ 10mm のものが多い。その形状や法量は甲山古墳例と近い。なお胎土には雲母を多量に含む。宍塚小学校校庭古墳は他の遺物から時期決定ができないが、石製模造品剣形が出土していること、突帯の割り付け沈線がみられⅣ期的な様相を残すことをふまえると、5 世紀末葉、あるいは 6 世紀でも比較的古い時期が想定される。

一方で沼田八幡塚古墳例にみられた突帯の形態は、塩谷の分類による三角形・山形とされるもので、例えば高崎山西 2 号墳や中台古墳群などにみられるものである。高崎山西 2 号墳では、上面を強くナデつけることで三角形に近い形状になっている突帯が一定数みられる。石室内から TK10 型式期の須恵器が出土している。中台 2 号墳は鉄鏃や馬具から 6 世紀後葉が想定されるが、突帯の断面形態は高崎山 2 号墳と類似する。突帯断面が台形であっても、上面を強くナデつけることで下端が崩れているものは後出的な要素と言えよう。また、三角形や山形の断面形をもつ突帯も基本的には新しい要素である（塩谷 1997）。

このように、甲山古墳と沼田八幡塚古墳出土埴輪の突帯を比較すると、甲山古墳出土埴輪のほうが相対的に古い様相を示す（第 10 図）。甲山古墳は沼田八幡塚古墳よりも先行する、もしくはほぼ同時期である可能性が指摘できるが、先述のように時期決定の強力な根拠とはなりえない。



第 10 図 「筑波山系の埴輪」における突帯の比較



第 11 図 「筑波山系の埴輪」の分布と関連古墳

2. 「筑波山系の埴輪」の展開

塩谷修は、桜川河口域の埴輪には、雲母粒子を多量に含む一群と、大粒の白色砂礫を多量に含む一群があることを指摘し、これらを「筑波山系の埴輪」として区分した(塩谷 1997)。石橋充はこれをふまえて「筑波山系の埴輪」の分布を示し、5 世紀末以降安定的に安定的に埴輪が供給される中心部と、地域的に異なる様相を示す周辺部という対比を指定した(石橋 2004)。「筑波山系の埴輪」は千葉県側にも供給され広い分布域を示すほか、形象埴輪においても古霞ヶ浦沿岸域を中心とした分布が指摘されている(稲村 1999, 山田 2017)。なお、埴輪の蛍光 X 線による胎土分析からは、筑波山麓から土浦入にかけてみられる粒子の多い埴輪胎土では Sr が突出する傾向にあること、一方で筑波・稲敷台地のうち粗粒の混入物が少ない胎土では全体的に Fe が突出しており、筑波山麓の胎土とは組成が異なることなどが指摘されている(石橋 2016)。

甲山古墳出土の円筒埴輪の胎土はすべて雲母を多量に含む一群に含まれる。その一方で、形象埴輪にはそれとは異なる胎土が認められた。とくに、家形埴輪の基底部の可能性があるとした破片(調査報告編第 27 図-33)は雲母をほとんど含まず、大粒の白色砂礫を多量に含んでいる。甲山古墳では円筒埴輪と形象埴輪で胎土の使い分けがなされている可能性がある。雲母を多量に含む胎土としては穴塚小学校内古墳、穴塚根本古墳、高崎山 2 号墳などが、白色粒子を多量に含む胎土には沼田八幡塚古墳、原出口 1 号墳、高津天神山古墳などが該当する。また、双方の胎土が認められる例としては、中台 3 号墳、今泉愛宕山古墳が該当する(石橋 2004)。

現在、雲母多量の胎土と白色粒子多量の胎土の相違が何に起因するかは明らかではない。ただし、それらが分布域を重ねること、同一古墳に供給されていることなどをふまえると、土浦

入を中心としながら密接な関係性をもつことがうかがえよう。今後は、これらの胎土がいつ、どこの古墳に供給されているか、またそれが円筒埴輪であるのか形象埴輪であるのかを整理することで、筑波山系の埴輪の流通システムが明らかになるとと思われる。

鳥羽江の東側に位置する下妻市千草 B2 号墳・同 3 号墳からは 6 世紀前半代の土師器坏が出土したが、そこでは雲母を多量に含む埴輪が確認されている。「筑波山系の埴輪」が 6 世紀前半において既に小貝川・鬼怒川水系におよぶ流通が確保されていたことがうかがえる⁷⁾。筑波山南麓にその産地が想定される埴輪が 6 世紀前半には広域に展開することと、同時期に筑波山南麓で甲山古墳や沼田八幡塚古墳が築造されたことは無関係ではあるまい（第 11 図）。筑波変成岩の流通も含め、甲山古墳の被葬者はこれらの流通と密接な関係性が想定される。

(荒井啓汰)

V. 甲山古墳出土のガラス小玉について

1. ガラス小玉の化学分析

ガラス小玉は形態に個体差が小さく、目視のみでの細かな分類は難しいことから、考古化学

第 3 表 日本列島で流通したガラスの種類

| 材質分類 | | 製作技法 | 着色剤 | 時期 | 推定出土量 | 生産地 | | |
|--------|----------|--------------|-----------------|--|----------------------------|---------------------------|-------------|------------|
| 大別 | 細別 | | | | | | | |
| 鉛ガラス | 鉛バリウム | GroupL I A | 巻きつけ | 銅 | B.C.3c -B.C.2c | 100 ± | 中国東北部 | |
| | | GroupL I B | 振り巻き | 銅、銅+漢青、漢青 | B.C.1c -A.D.2c | 2500 ± | 中国南部 | |
| | | GroupL I C | 包み巻き | 銅 | A.D.1c | 200 ± | 中国 | |
| | 鉛 | GroupL II A | 巻き付け | 銅 | A.D.1c -A.D.2c | 1000 ± | 中国 | |
| | | GroupL II B | 巻き付け | 銅、鉄 | A.D.7c- | 3000+ | 百済→日本 | |
| カリガラス | 中アルミナ | GroupP I | 引き伸ばし、包み巻き、加熱貫入 | コバルト、鉄、銅+マンガン | B.C.3c - (A.D. 5c) | 80000 ± | 南アジア | |
| | 高アルミナ | GroupP II | 引き伸ばし | 銅 | B.C. 1 c (A.D. 3c) | 60000 + | ベトナム北半～中国南部 | |
| ソーダガラス | ナトロン | GroupS I A | 包み巻き/連珠 | コバルト | A.D. 2c | 150 ± | 地中海周辺 | |
| | | GroupS I Ba | 巻き付け | コバルト | early A.D.5c | 100 ± | 地中海周辺 | |
| | | GroupS I Bb | 包み巻き | コバルト | early A.D.5c | 500 ± | 地中海周辺 | |
| | | GroupS I Bc | 包み巻き、連珠 | コバルト | early A.D.5c | | 地中海周辺 | |
| | 高アルミナ | GroupS II A | 引き伸ばし | コバルト | lattar A.D. 1 c - (A.D.5c) | 5000 ± | 南アジア、東南アジア | |
| | | GroupS II B | 引き伸ばし、連珠 | 銅、銅+マンガン、鉄、銅コロイド、酸化銅コロイド、錫酸鉛、銅+錫酸鉛、マンガン、コバルト | A.D. 4 c -A.D. 6 c | 150000 ± | 南アジア、東南アジア | |
| | 植物灰 | GroupS III A | 包み巻き | 鉄 | lattar A.D. 1 c | 10 + | 中央アジア～西アジア | |
| | | GroupS III B | 引き伸ばし、連珠 | コバルト、鉄 | lattar A.D.5c -A.D.6c | 100000 ± | 中央アジア～西アジア | |
| | | GroupS III C | 変則的引き伸ばし | コバルト、銅、マンガン、錫酸鉛、銅+錫酸鉛 | early A.D.7c | 10000 ± | 中央アジア～西アジア | |
| | | ナトロン主体 | GroupS IV | 引き伸ばし | コバルト | A.D. 2 c - (A.D.5c) | 10000 ± | 南アジア、東南アジア |
| | | | GroupS V A | 引き伸ばし | 銅+錫酸鉛、銅 | lattar A.D. 1 c -A.D. 2 c | 5000 ± | 南アジア、東南アジア |
| | プロト高アルミナ | GroupS V B | 連珠 | 銅 | lattar A.D. 2 c -A.D. 3 c | 500 ± | 不明 | |
| | | GroupS V C | 加熱貫入 | 銅 | A.D. 4 c | 500 + | 不明 | |

的な分析による研究が基本となる。日本の遺跡から出土するガラス製品の材質の研究は 1950 年代からおこなわれており、90 年代後半以降、肥塚らにより日本列島でみられるガラスの材質グループごとの消長が示された（肥塚 1995 など）。化学分析の結果明らかになるガラスの組成は、ガラスの原材料に起因するものであり、生産地に関する情報を示すと考えられる。近年では、大賀と田村が、化学的組成と製作技法の両観点から、弥生時代・古墳時代のガラス小玉を 20 種類に細分し、出土事例の検討によりそれぞれの消長を提示している（Oga・Tamura 2013）ほか、各材質グループに対する詳細な検討もおこなわれつつある（第 3 表：大賀・田村 2016）。

ここでは、甲山古墳から出土した 44 点のガラス小玉（No.1～No.44）について、蛍光 X 線分析による化学組成分析調査を実施した結果を報告する。

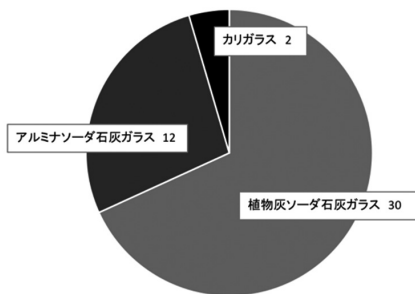
2. 方法

ハンドヘルド型蛍光 X 線分析装置 XL3t-950s（Niton）による蛍光 X 線分析をおこなった。X 線源には多陰極 Ag ターゲットを用い、検出器は SDD（Silicon Drift Detector）を用いている。X 線管電圧は 50 k V、X 線管電流は自動可変（最大 200 μ A）、測定モードは鉱物モード、測定時間は 120 秒とした。

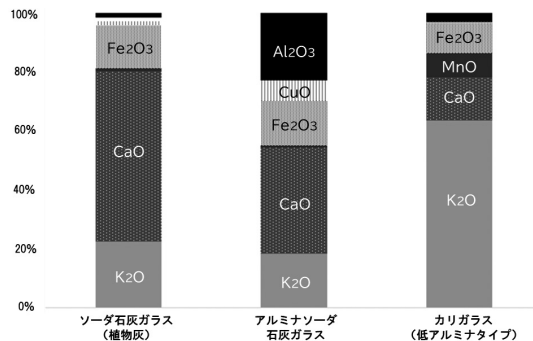
3. 分析結果

分析の結果、甲山古墳出土ガラス小玉は全てアルカリケイ酸塩ガラスであった。さらに、主に酸化カルシウム（CaO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）の含有比の違いから植物灰ソーダ石灰ガラスグループとアルミナソーダ石灰ガラスグループ、カリガラスグループに分類された。分類の結果は、第 12 図・第 13 図、及び調査報告編掲載の観察表に示す。

植物灰ソーダ石灰ガラスグループ 融剤としてナトリウム（Na₂O）を用いるソーダ石灰ガラスは、カルシウム（Ca）が多く、カリウム（K₂O）が少ないという特徴をもつ。その中でも、カルシウム（Ca）の含有量が多く、アルミニウム（Al₂O₃）の含有量が比較的少ないものは植



第 12 図 甲山古墳出土ガラス小玉の組成タイプごとの内訳



第 13 図 ガラス小玉の組成タイプごとの平均元素含有量 (SiO₂を除く)

物灰ソーダ石灰ガラスと呼ばれる。西アジアや中央アジアで生産されたと考えられ、日本列島では古墳時代後期から流通することが知られる。本古墳出土資料 44 点のうち、紺色から青色半透明を呈する 30 点が分類された。コバルト (Co) が少量含まれることから、着色要因として想定される。30 点はすべて引き伸ばし技法によるものであり、大賀・田村の上述の分類では S III B に該当すると考えられる。

アルミナソーダ石灰ガラスグループ 融剤としてナトリウム (Na₂O) を用いるソーダ石灰ガラスのうち、カルシウム (Ca) の含有量が比較的少なく、アルミニウム (Al₂O₃) の含有量が多い特徴をもつものは、アルミナソーダ石灰ガラスとよばれる。南アジアや東南アジアが主な生産地と推定され、日本列島では弥生時代後期から認められるが、古墳時代中期以降に最も流通量が多くなることが知られる (肥塚 1997, 肥塚 ほか 2010)。甲山古墳のガラス小玉のうち、引き伸ばし技法による小玉 12 点が分類された。色調は、銅 (Cu) を含有し、銅着色による淡青色を呈するものと、コバルト (Co)、マンガン (Mn) を含有し紺色から青色を呈するものが認められる。大賀・田村の上述の分類では S II B に該当すると考えられる。

カリガラスグループ 融剤にカリウム (K₂O) を用いるためカリウムの含有量が多いタイプはカリガラスとよばれ、甲山古墳出土ガラス小玉のうちの 2 点がこれに分類された。カリガラスは西方ではみられないアジア特有のガラスであり、酸化アルミニウム (Al₂O₃) が比較的多い高アルミナタイプと酸化カルシウム (CaO) が比較的多い低アルミナタイプがあることが知られている (Lankton and Dussubieux 2006)。甲山古墳のカリガラスはいずれも後者に対応する。このような特徴をもつガラスタイプは、南アジアを中心に分布する。大賀・田村は上述の分類においてこのタイプのガラスを中アルミナカリガラス (P I) とし、出土事例等の検討から流通期間を紀元前 3 世紀から紀元後 5 世紀頃においている。

一方、本古墳出土カリガラス小玉のうち 1 点は、その形状や、ザラメ状の溶け残りから鑄造で製作された可能性が考えられる。その場合、引き伸ばし技法による低アルミナカリガラス小玉の破片を 2 次的に再溶融したものであろう。

まとめ ここでは、甲山古墳の副葬ガラス小玉 44 点に対してハンドヘルド型蛍光 X 線分析装置を用いた化学組成分析を行った。その結果、植物灰ソーダ石灰ガラス、アルミナソーダ石灰ガラス、低アルミナカリガラスの 3 タイプに分類された。いずれも古墳時代後期に位置づけられる典型的なガラスであり、アジア地域で広く分布が認められ、対外交流の中で入手されたインド - パシフィックビーズであるといえる。 (加藤千里)

VI. 常総地域における一石棺内複数埋葬

1. 甲山古墳の埋葬過程

甲山古墳では墳頂部から 2 基の箱式石棺が確認された。まずこれら 2 基の箱式石棺の関係と、その埋葬過程を考えたい。2 基の石棺の時期差であるが、第 1 号棺と第 2 号棺はほぼ同一のレベルで構築されている。いずれも明確な墓坑はみられず、墳丘の築造途中で石棺の構築がなさ

れたと判断され、2基の箱式石棺は同じタイミングで構築されたと想定される。なお、第2号棺における鉄鏃の様相を見る限り、各鏃群に明確な時期差はみられず、ここから各遺体に時期差を見出すことはできない。

次に人骨の状況をもてみると、解剖学的自然位を保たず、意図的に動かされたと判断されるものがある。とくに、1号人骨に伴う歯が頭蓋骨周辺に見当たらず、かわりに2号人骨の頭蓋骨周辺に散乱している状況は、1号人骨の頭蓋冠が二次的に移動させられた可能性を示唆する(第14図)。加えて石棺中央部に位置する人骨の配置も、解剖学的自然位をとどめているとは言い難い。

ただし、石棺上面の土層断面図(報告編第7図)を見る限りでは、石棺上面の二次的な掘り込みは認められない。調査時にこのような二次的な掘り込みが見逃されていた可能性も考慮しなければならないが、追葬のような時期差を伴う利用を積極的に評価する根拠はない。

以上のことから、甲山古墳の埋葬過程について次の2つのパターンが想定しうる。

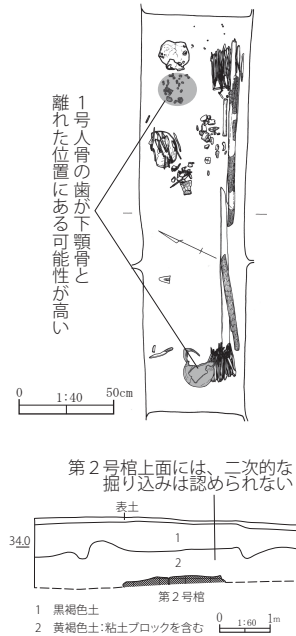
①第1・2号棺の遺体がすべて同タイミングに埋葬されたという理解。石棺上面に二次的な掘り込みがないことを重視し、これらの埋葬がすべて一度に行われたとする。この場合、数人は長期の瀕ないし他所での一次葬を経て骨化しており、造墓契機となった人物の死をもって、これらの人骨を一度に埋葬したと解釈される。

②初葬後一定期間を経て棺が再度開けられ、他の人物が埋葬されたという理解。これは第2号棺において1号人骨が意図的に移動させられた可能性がある点を重視する。この場合、初葬の後、一定期間を経て墳頂部を広く掘り込み、棺蓋が開けられ、各棺に2体目ないし3・4体目の埋葬をおこなったと解釈される。

誤解を恐れず簡潔にまとめれば、①が改葬的状況、②が追葬的状況であると言える。これらは社会的意義の異なる埋葬方法であり、その解釈は慎重にしなければならない。本事例では、人骨の遺存状況の悪さも相まって、上記のパターンのどちらであるか決定することはできないが、石棺上面に二次的な掘り込みの痕跡が確認できないことを重視すると、①の可能性が高いといえるかもしれない。いずれにせよ、遺物相に明確な時期差が認められないことから、長期にわたる利用は想定できないものと思われる。

2. 一石棺内複数埋葬の初現

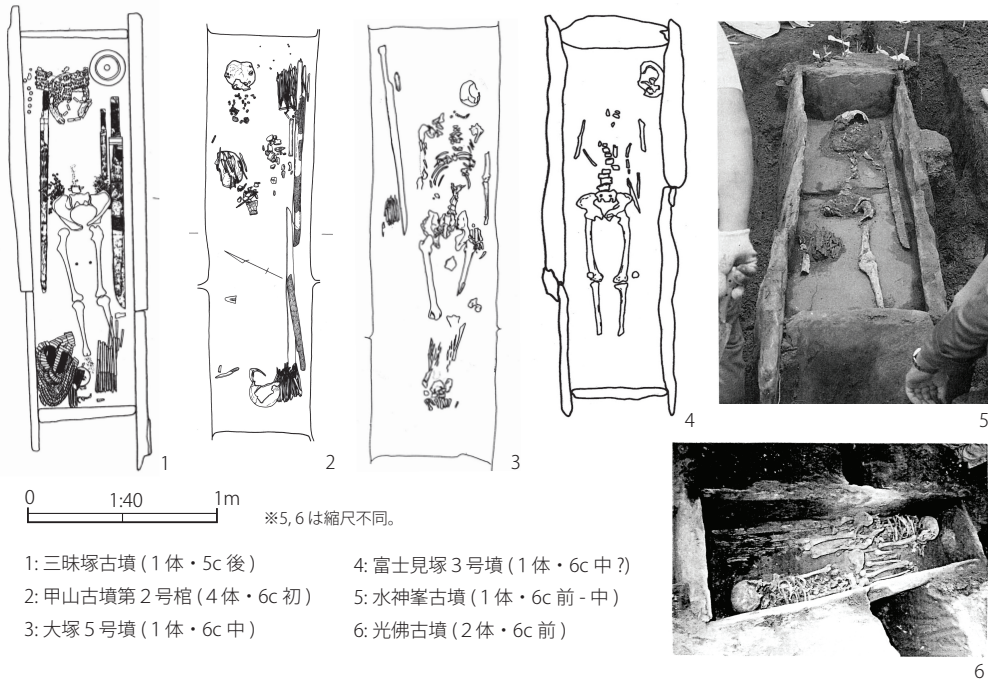
甲山古墳の埋葬過程がどちらのパターンであっても、ひとつの石棺の中に複数の遺体が埋葬されていたことは疑いない。常総地域においては、このような一石棺内複数埋葬⁸⁾が多く確認



第14図 甲山古墳の埋葬状況

第4表 導入期の箱式石棺における埋葬の諸相

| 古墳 | 所在地 | 墳丘 | 時期 | 埋葬人数 | 構成 | 頭位方向 | 交連 | 赤彩 | 文献 |
|---------------------|-------------|--------|--------|------|-------------------|---------------------|--------|----|----|
| 三味塚古墳 | 行方市 | ● 83 | 5c 後 | 1 | 成人男性 1 | N-101°-E | ○ | ○ | 1 |
| 富士見塚 1号墳 (前方部石棺) | かすみが うら市 | ● 80 | 5c 末 | 2? | 成人男性 1 成人女性 1 | — | 不明 | ○ | 5 |
| 甲山古墳第 1号棺 | つくば市 | ○ ?30 | 6c 初 | 2 | 成人男性 1 成人女性 1 | N-16°-W | 不明 | ○ | 6 |
| 甲山古墳第 2号棺 | つくば市 | ○ ?30 | 6c 初 | 4 | 成人男性 2 幼児 2 | N-67°-E N-113°-W | 対置 × ? | ○ | 6 |
| 風返大日山古墳 | かすみが うら市 | ● 55 | 6c 前 ? | 3? | 成人男性 2 成人女性 1? | — | 不明 | ○ | 7 |
| 光佛古墳 | 美浦村 | ● ?50? | 6c 前 | 2? | 不明 | N-119°-E N-59°-W | 対置 | ○ | 11 |
| 水神峯古墳 | 稲敷市 | 不明 | 6c 前 | 1 | 不明 | — | ○ | ○ | 12 |
| 大塚 5号墳 | 石岡市 | ● 32 | 6c 中 | 1? | 不明 | N-114°-E | ○ | ○ | 13 |



第15図 導入期の箱式石棺における埋葬状況

されているが、その初現を探るうえで甲山古墳は好例である。

第4表は、常総地域における5世紀後葉から6世紀中葉の箱式石棺で、埋葬人数が明らかになっている事例を取り上げたものである。埋葬人数は1体の例も多いが、富士見塚1号墳、甲山古墳第1・2号棺、風返大日山古墳、光佛古墳では石棺内複数埋葬が認められる。細かな時期の前後はあるにせよ、遅くとも6世紀初頭から前葉の段階には複数埋葬の存在は確実にと言える。

また、出土状況が分かる例をみると、ほとんどの事例で各関節が交連している状態にあり、肉体がついた状態で埋葬されたことが想定される（第15図）。光佛古墳は写真から2体の埋葬が認められるが、双方とも解剖学的自然位を保っている。骨化後の埋葬が疑われるのは現状では甲山古墳第2号棺例のみであるが、複数埋葬を行う風返大日山古墳の状況がわからないため、今後検討を要する。埋葬された人物には成人男性が多く、複数埋葬の場合はそこに成人女性ないし子どもが加わる構成となっている。

埋葬頭位は、基本的に東側を志向する。これは常総地域の箱式石棺において顕著に認められるものである。しかしここで注目したいのは、甲山古墳第2号棺において頭蓋骨が対置に配置されている点である。2号人骨の頭蓋冠は東側にあるが、1号人骨の頭蓋骨は西側に置かれている。加えて、鉄刀と鉄鏃の方向も向かい合う状態であり、遺物配置も含めて対置を志向している。解剖学的自然位を保つ遺体が対置される事例としては、美浦村光佛古墳、香取市平山寺台古墳などがある。このような対置の例は常総地域では少なく、何らかの特殊な社会的状況も示唆されよう。なお、甲山古墳第2号棺の頭蓋骨はいずれも成人男性のものであり、対置される遺体が必ずしも男女とは限らない。

3. 一石棺内複数埋葬の系譜

常総地域における一石棺内複数埋葬の初現は6世紀初頭から前葉に求められることが明らかになったが、問題となるのはこの埋葬方法の系譜である。まず、横穴式石室における埋葬との関係性の有無を検討したい。

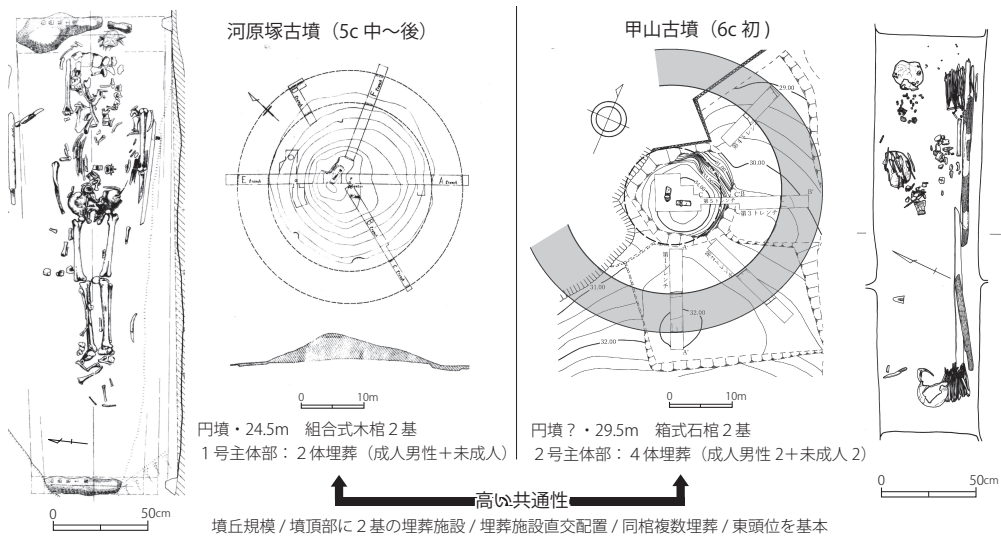
常総地域における横穴式石室の初現は土浦市高崎山2号墳であり、石室内よりTK10型式期の須恵器が出土している（山武考古学研究所2001）。甲山古墳の鉄鏃は高崎山2号墳よりも古相を呈し、甲山古墳は高崎山2号墳よりも古い時期が想定される（第Ⅲ章参照）。つまり、常総地域においては、横穴式石室の導入よりもやや早い段階で一石棺内複数埋葬が認められることになり、一石棺内複数埋葬の背景に横穴式石室の導入は想定しにくい。実際、高崎山2号墳では1体分の埋葬が想定され、複数埋葬は認められない。常総地域における一石棺内複数埋葬は、横穴式石室の埋葬習俗の影響を受けて成立したのではなく、横穴式石室受容以前の埋葬方法にその起源が求められるだろう。

横穴式石室受容以前から複数埋葬がなされているのであれば、その系譜は従来の埋葬施設における埋葬習俗に求められるはずである。そもそも木棺直葬系の埋葬施設において人骨の遺存例が非常に少ない点が問題であるが、その中で千葉県河原塚古墳の事例が注目される（國學院大學大学院大場研究室1959）。河原塚古墳は、千葉県松戸市に所在する直径25.5mの円墳である。墳頂部から2基の埋葬施設が確認され、2基は方位を違えている。このうち第1主体部は白色粘土を充填した木棺直葬で、主軸方向はN-82°-Eである。この第1主体部から、成人男性1体と幼年人骨1体の計2体の人骨が確認された（第16図）。成人男性の人骨は、上半身の部分が攪乱を受けているものの、脚部の各部位が交連しており伸展葬が想定される。幼年人骨

は成人男性の頭部付近から確認されているが、詳細は不明である。主体部から鉄剣、直刀、鹿角装刀子、鉄鏃、ガラス小玉が出土し、また周溝からは石製模造品刀子形が出土している。時期は、TK208～TK23 型式期が想定される⁹⁾。

河原塚古墳の事例では、木棺直葬においても同棺複数埋葬が確認できること、石棺内複数埋葬と共通する特徴を有することなどの特徴において、非常に示唆的である。とくに、成人男性+未成人の組み合わせであること、方位を違える2基の埋葬施設をもつこと、頭位方向が東を志向することなどの特徴は甲山古墳と極めて類似しており、両者の相違は木棺と石棺の違いのみである。河原塚古墳はTK208～TK23 型式期が想定され、甲山古墳とはやや時期に開きがあるため、直接彼我を結びつけるわけにはいかないかもしれない。しかし、少なくとも中期において木棺直葬墳で同棺複数埋葬を行っていることは確実であり、当該地域にその系譜があったことは指摘できるだろう。

以上、常総地域における一石棺内複数埋葬について検討したが、この習俗が横穴式石室の影響で成立したのではなく、当該地域において古墳時代中期段階からみられた習俗に系譜が求められる可能性が示唆された。最後に今後の課題について触れたい。まず、全国的な同棺複数埋葬の事例との比較検討が必要である。西日本における同棺複数埋葬については辻村純代や清家章の検討があるが、これらは親族構造の解明とも密接に関わる問題である(辻村 1983, 清家 2016)。清家は同棺複数埋葬における成人男性+未成人の組み合わせが中期後葉から現れることに父系化の萌芽をみるが¹⁰⁾、甲山古墳や河原塚古墳も成人男性+未成人の構成であり、時期的な類似性も含めて興味深い(清家 2016)。また、中期の千葉県域では、石神2号墳や猫作・栗山16号墳など常総型石枕を伴う埋葬において2～3体の同棺複数埋葬が想定される(沼澤 1977)。改葬の問題も含め、今後検討していきたい。(荒井啓汰)



第16図 河原塚古墳と甲山古墳の類似性

VII. 筑波地域の首長系譜と甲山古墳

「調査報告編」の冒頭で述べたように、甲山古墳を調査する契機となった「筑波古代地域史の研究」は、特定の小地域を対象とした研究の中から国家形成期の地域史像を明らかにしようという目的をもっておこなわれたものである(増田編 1981)。最後に、そうした初期の目的に沿って、現時点における甲山古墳の評価を述べておきたい。

1. 従来の学説

甲山古墳が位置する筑波地域は桜川の中流域にあたり、その兩岸には古墳時代前期以来の比較的規模の大きな古墳が分布している。それらの有力古墳は、それぞれ時期を異にして築かれていること、また、各古墳が築かれた場所は『倭名類聚抄』に記された常陸国筑波郡の各郷の比定地に重なることから、集団的基盤を異にする複数の造営主体によって古墳時代の各時期に営まれたものと解釈されてきた(岩崎 1990)。その具体的な変遷は、次のように理解されている。

まず古墳時代前期後半に水守桜塚古墳(前方後方墳・墳丘長約 30 m)が桜川西岸の台地上に築かれ、次いで同地区に山木古墳(前方後円墳・墳丘長約 48 m)が築かれる。両古墳はいずれも「水守郷」の比定地に存在するが、後続する有力古墳は見当たらない。一方で、古墳時代中期の有力古墳と目されるのは、桜川東岸の丘陵上に位置する土塔山古墳(前方後円墳・墳丘長約 61 m)であり、同古墳は「大貫郷」に所在する。その後、古墳時代後期前半になると、同じ桜川東岸でもやや北側に位置する八幡塚古墳(前方後円墳・墳丘長約 94 m)が「筑波郷」の地に築かれる。これにつづいて築かれたとみられるのが、桜川東岸の南側に位置する甲山古墳(円墳?・約 30 m)であり、同古墳は「三村郷」に所在する。

以上のような有力古墳の変遷は、4世紀末から6世紀前半にかけての5世代にわたる首長の存在を物語るとともに、「首長権が一地域集団に固定することなく、ムラを拠点とするいくつもの集団の間を、つぎつぎに移動するような、ルーズな地域連合体」(岩崎 1990: 174 頁)のあり方を示すものと考えられてきた。こうした筑波地域における有力古墳の変遷は、いわゆる「首長権輪番制」のモデルケースと理解されてきたが、その後の編年研究やあらたな調査成果により、今日では根本的な見直しが必要となっている。

2. 首長系譜の再整理

筑波地域で最古の有力古墳と考えられてきた水守桜塚古墳は、近年の調査で墳丘長約 58 m の前方後円墳であることが明らかとなっている(滝沢ほか 2014・2015)。また、その周辺に位置する水守 2 号墳(円墳・墳丘径約 32 m)は、鉄剣や鉄鏃などの出土遺物から前期に遡る年代が与えられ、ほぼ同規模の水守 1 号墳、同 3 号墳もそれに相前後して築かれた可能性が高いとみられる。このように桜川西岸では、水守桜塚古墳、山木古墳につづいて 30 m 規模の円墳が順次築かれ、墳形の変化をともしないながらも、少なくとも中期前半までは一連の首長系譜を形成していたものと推定される。

一方、桜川東岸については、従来中期の前方後円墳とされてきた土塔山古墳の位置づけに再検討の余地がある。後円部径と前方部長が一致するという見方から、従来は中期後半の築造と考えられてきたが、あらためて後円部の復元を試みると、後円部径が前方部長を上回る可能性が高い。そうした見方に誤りがなければ、同古墳には前期後葉～末の年代が想定される。

以上のように、桜川を挟んで両岸に位置する有力古墳のうち、古墳時代前期から中期にかけて築かれたとみられる古墳の変遷観については、大きな見直しが必要である。古墳時代中期の状況はなお判然としないものの、墳丘径30 m以上の円墳なども視野に入れて整理すると、桜川の両岸に分布する有力古墳は全体として一連の首長系譜を形成するものとは考えにくく、筑波西部グループ（桜川西岸）、筑波東部グループ（桜川東岸）として、それぞれに首長系譜を形成していたものと考えられる（滝沢 2015）。また、前期末から中期にかけての有力古墳の円墳化や、中期における前方後円墳の不在を経て、後期前葉以降に前方後円墳の築造が再開されるプロセスは、王権中枢を発信源とする政治変動（都出 1991）の影響を受けたものと考えるのが妥当であろう。

3. 甲山古墳の評価

今回の検討によれば、甲山古墳の築造年代は、鉄鍬の編年的位置づけから、古墳時代後期前葉（MT15 式期）に求められる。円筒埴輪の編年的位置づけもそれと矛盾するものではなく、突帯形状の比較からすると、八幡塚古墳に先行する可能性も考えられる。また、茎元挟りを有する鉄刀は、倭装大刀としての儀礼的な性格をそなえ、必ずしも階層的な性格を示すものではない。さらに、一石棺内複数埋葬は中小規模古墳との関連をうかがわせるもので、甲山古墳の被葬者を地域最上位の首長層とみることへの疑問を抱かせる。

甲山古墳の出土遺物や埋葬状況をめぐるあらたな理解は、八幡塚古墳と甲山古墳が古墳時代後期前半に前後して築かれた古墳とはみなしがたいこと、加えて甲山古墳の首長墳としての性格に再検討の必要があることを示している。これらの点も、かつての変遷観とその解釈に大きな見直しを迫るものである。

とはいえ、甲山古墳は30 m規模の円丘を有している点で、中期後葉から後期前葉にかけて認められる古式群集墳クラスの小規模古墳と同列に扱うことは難しい。甲山古墳の被葬者については、八幡塚古墳のような大型前方後円墳の被葬者とは階層的な位置づけを異にしながらも、小規模古墳の被葬者層とは一線を画した存在として理解するのが妥当ではないだろうか。その場合、ほぼ同時期に築かれたとみられる八幡塚古墳の被葬者を最上位としながら、後期前半段階にはより複雑な地域内の政治秩序が形成されていた可能性が考えられよう。

甲山古墳と八幡塚古墳は、筑波東部グループの中では最南端と最北端に位置しており、甲山古墳に比較的近い位置には、後期末以降に一連の有力古墳（中台1・2号墳、平沢1号墳など）が築かれ、やがて同地区に筑波郡衙が設置される。今後は、未調査の古墳の実態解明とともに、こうしたあり方を十分に視野に入れて検討を進めていく必要がある。（滝沢 誠）

謝辞

本稿の執筆にあたり、石橋 充氏、賀来孝代氏、小林孝秀氏、塩谷 修氏、平林大樹氏からご指導を賜りました。また、美浦村文化財センター、稲敷市歴史民俗資料館からは写真の掲載についてご快諾いただきました。末筆ながらお礼申し上げます。

註

- 1) 「導入期」は、常総地域に箱式石棺が導入される5世紀後葉から6世紀前葉までの時期を指す。
- 2) 茎元抉りの名称については臼杵勲の呼称を参考にした(臼杵 1984)。
- 3) 当然、ある形状の大刀にひとつの社会的機能が一對一で対応するとは限らない。
- 4) 文献史料ではしばしば、剣や刀が生と死を区別するモチーフとして登場する(波平 1985)。
- 5) ここでは逆刺を有する鍔を検討するが、同時期には鍔身関が角関の例も併存する(茨城県三味塚古墳、同富士見塚1号墳)。必ずしも逆刺→角関という変遷をたどるわけではない(大谷 2003)。なお、鉄鍔の分類については、平林大樹のものを参考にした(平林 2013)。
- 6) 鈴木一有も、中期前半の例について矢柄が折り取られた可能性を指摘している(鈴木 2000)。
- 7) 小貝川・鬼怒川水系以西の水系(常陸川とその支流周辺地域)には基本的に「筑波山系の埴輪」が展開せず、異なる胎土の埴輪が確認されており、流通圏としての地理的範囲の限界を規定することができるかもしれない。
- 8) 従来使用されてきたように「同棺複数埋葬」の用語が妥当であろうが(辻村 1983, 清家 2016)、常総地域で後・終末期に一般化する石棺内での複数埋葬を強調する意味をこめて、本稿では「一石棺内複数埋葬」の語を使用する。
- 9) 近年の再整理における須恵器と鉄鍔の年代観による(小林孝秀氏ご教示)。なお、1959年報告で鉄釘とされていたものは、鉄鍔の頸部破片であることが明らかとなっている。
- 10) ただし清家は、成人女性+未成人の場合もあることから、父系化は後期においても貫徹しないことを強調する。

参考文献

- Dussubieux, L., and Gratuze, B., 2013 Glass in South Asia, *Modern Methods for Analysing Archaeological and Historical Glass*, Volume I, pp.399-413.
- Oga, K., Tamura, T. 2013 Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology* 9, pp.1646-1655.
- 石橋 充 1995 「常総地方における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号 31-57頁。
- 2004 「筑波山系の埴輪」について『埴輪研究会誌』第8号 1-16頁。
- 2016 「茨城県の埴輪の胎土分析」『埴輪研究会誌』第20号 103-118頁。
- 茨城県教育財団 1995 『中台遺跡』。
- 稲村 繁 1999 『人物埴輪の研究』同成社。
- 岩崎卓也 1990 『古墳の時代』教育社。
- 上野恵司・安永真一 1989 「下野・箱式石棺考」『栃木県考古学会誌』第11号 79-97頁。
- 臼杵 勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 49-70頁。

- 内山敏行 2000 「鉄器副葬の性格を考える上での視点」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会 155-166 頁.
- 大関 武 1998 「沼田八幡塚古墳出土の埴輪について」『婆良岐考古』第 20 号 141-153 頁.
- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第 10 号 静岡県埋蔵文化財調査研究所 175-188 頁.
- 大谷宏治 2004 「鉄鏃について」『寺山古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所 85-86 頁.
- 大和久震平 1969 「玉纏太刀について」『考古学雑誌』第 55 巻第 2 号 75 頁.
- 1972 「玉纏太刀について」『栃木県小山市喜沢小山カントリー倶楽部内 桑 57 号墳発掘調査報告書』小山市教育委員会 72-74 頁.
- 置田雅昭 1985 「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学報』第 36 巻第 3 号 天理大学学術研究会 39-63 頁.
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号 1-70 頁.
- 川畑 純 2015 『武具が語る古代史 古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会.
- 黒澤彰哉 1993 「常総地域における群集墳の一考察—茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から—」『婆良岐考古』第 15 号 95-154 頁.
- 2005 「常総地域における古墳埋葬施設の特質」『婆良岐考古』第 27 号 105-141 頁.
- 2012 「茨城県における後期・終末期前方後円墳の地域性と階層性」『茨城県史研究』96 号 1-30 頁.
- 齊藤大輔 2017 「古墳時代中期の刀剣編年」『中期古墳研究の現状と課題 I ~ 広域編年と地域編年の齟齬 ~ 発表要旨集・資料集』中国・四国前方後円墳研究会第 20 回研究集会 73-88 頁.
- 沢田むつ代 2008 「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き—織物などの種類と仕様—」『MUSEUM』617 東京国立博物館 5-35 頁.
- 塩谷 修 1997 「霞ヶ浦沿岸の埴輪—5・6 世紀の埴輪生産と埴輪祭祀」『霞ヶ浦の首長—古墳にみる水辺の権力者たち—』霞ヶ浦町郷土資料館 66-75 頁.
- 篠田泰輔 2005 「玉里古墳群における円筒埴輪の変遷」小林三郎編『茨城県霞ヶ浦北岸地域における古墳時代在地首長層の政治的諸関係理解のための基礎研究』科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書 127-141 頁.
- 白石太一郎 1993 「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集 141-162 頁.
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8 吉川弘文館 529-644 頁.
- 鈴木一有 1999 「古墳時代中期前半における鉄鏃組成」『五ヶ山 B2 号墳』浅羽町教育委員会 93-99 頁.
- 2000 「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会 75-94 頁.
- 2012 「武器類の評価」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集 212-218 頁.
- 清家 章 2010 『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会.
- 2016 「古墳時代中期後葉・の親族構造再論」『史林』第 99 巻第 1 号 81-100 頁.
- 滝沢 誠 2015 『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社.
- 滝沢 誠ほか 2014 「つくば市水守桜塚古墳 2012 年度発掘調査概要」『筑波大学先史学・考古学研究』第 25 号 81-95 頁.
- 2015 「つくば市水守桜塚古墳 2013 年度発掘調査概要」『筑波大学先史学・考古学研究』第 26 号 89-98 頁.
- 田中 裕 2012 「古墳と水上交通—茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して—」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』東北・関東前方後円墳研究会 67-80 頁.
- 田中広明 1988 「霞ヶ浦の首長—茨城県出島半島をめぐる古墳時代の研究—」『婆良岐考古』第 10 号

11-49 頁.

- 田村朋美 2018 「化学組成と製作技法からみるガラス小玉の産地と交易ルート」『第 11 回アジア考古学四学会合同講演会 アジアの煌めき ―ガラスが結ぶアジアの東西―』日本考古学協会・日本中国考古学会・東南アジア考古学会・西アジア考古学会 9-12 頁.
- 田村隆太郎 2003 「副葬鉄群への指向」『研究紀要』第 10 号 静岡県埋蔵文化財調査研究所 199-216 頁.
- 千葉隆司 1999 「古墳時代の鉄鏃(3)(茨城県における 6・7 世紀の様相)」『婆良岐考古』第 21 号 91-103 頁.
- 辻村純代 1983 「東中国地方における箱式石棺の同複数埋葬 ―その地域性と社会的意義について」『季刊人類学』第 14 巻第 2 号 52-80 頁.
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』343 5-39 頁.
- 伝田郁夫 2002 「霞ヶ浦高浜入り周辺の埴輪生産の展開とその特質」『駿台史学』第 116 号 79-105 頁.
- 波平恵美子 1985 『ケガレ』東京堂出版.
- 沼澤 豊 1977 「石神 2 号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 118-154 頁.
- 日高 慎 2003 「霞ヶ浦周辺の円筒埴輪―編年研究をおこなうための前提作業―」『埴輪研究会誌』第 7 号 27-43 頁.
- 肥塚隆保 1995 「古代珪酸塩ガラスの研究 ―弥生～奈良時代のガラス材質の変遷―」『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集』II 同朋舎 929-967 頁.
- 平林大樹 2013 「信濃における後期・終末期古墳副葬鉄の変遷」『物質文化』93 号 123-138 頁.
- ブライ・フリバル・ペトラ 2014 「常陸における古墳時代中期末・後期の石棺出土人骨」『筑波大学先史学・考古学研究』第 25 号 37-46 頁.
- 増田精一編 1982 『筑波古代地域史の研究―昭和 54～56 年度特定研究費による調査研究概要―』筑波大学.
- 松木武彦 1991 「前期古墳副葬鉄の成立と展開」『考古学研究』第 37 巻第 4 号 29-58 頁.
- 2001 「弓と矢の系譜―日本原始・古代の武器弓矢の位置づけ」『季刊考古学』第 76 号 30-33 頁.
- 水野敏典 2003 「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』第 8 回東北・関東前方後円墳研究会大会 東北・関東前方後円墳研究会 29-42 頁.
- 三宅博士 1988 「奥山 B- II 号横穴出土大刀について」『季刊文化財』第 61 号 34-42 頁.
- 茂木雅博 1971 「箱式石棺について」『常陸大生古墳群』雄山閣 118-159 頁.
- 茂木雅博編 1979 『常陸八幡塚古墳整備報告書』八幡塚古墳調査団.
- 山田俊輔 2017 「古墳時代後期の「常総の内海」と埴輪」『埴輪研究会誌』第 21 号 13-21 頁.
- 山内紀嗣 2003 「木製刀装具からみた大刀生産」『第 9 回鉄器文化研究集会 鉄器研究の方向性を探る―一刀剣研究をケーススタディとして―』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所 165-176 頁.

報告書

- 安藤鴻基・杉崎茂樹・糸川道行・長沼律朗 1978 「千葉県香取郡小見川町三之分目大塚山古墳の長持形石棺遺材」『古代』64 号 35-45 頁.
- 市原市教育委員会 1985 『上総江子田金環塚古墳』.
- 岩間町史編さん委員会 2002 『岩間町史』.
- 宇都宮市教育委員会 2004 『本村遺跡 弥生・古墳編』.
- 大和久震平 1974 『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会.
- 笠間市教育委員会 2008 『御前塚古墳群・北浦東遺跡』.
- 忽那敬三・佐々木憲一・鈴木一有・太田雅晃・岩本崇・沢田むつ代 2019 「茨城県三味塚古墳出土遺物の研究」『明治大学博物館研究報告』第 23 号 1-54 頁.

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019 『金井東裏遺跡』 古墳時代編.
- 毛野考古学研究所 2017 『千草 B 古墳群』 下妻市教育委員会.
- 国学院大学大学院大場研究室 1959 『松戸河原塚古墳』.
- 山武考古学研究所 2001 『高崎山古墳群西支群第 2 号墳・第 3 号墳発掘調査報告書』.
- 白井久美子 1995 「高柳銚子塚古墳をめぐる諸問題」『日本考古学』第 2 号 119-138 頁.
- 白井久美子 2003 「祇園・長須賀古墳群」『千葉県の歴史』資料編考古 2 (弥生・古墳時代) 千葉県史料研究財団 599-616 頁.
- 楢山林継 1979 『史跡弁天山古墳』 富津市教育委員会.
- 玉里村教育委員会 2000 『玉里村権現山古墳発掘調査報告書』.
- 千葉県教育振興財団 2012 『研究紀要』 27.
- 筑波大学甲山古墳研究グループ 2019 「つくば市甲山古墳の研究—調査報告編一」『筑波大学先史学・考古学研究』第 30 号 27-104 頁.
- 土浦市教育委員会 1987 『般若寺遺跡 (西屋敷地内)・竜王山古墳 般若寺遺跡 (穴塚小学校地内) 発掘調査概報』.
- 出島村遺跡調査会 1992 『富士見塚古墳群発掘調査報告書』 出島村教育委員会.
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2004 『琴平塚古墳群 (西刑部西原遺跡 1・2・6 区)』.
- とちぎ生涯学習文化財団 2006 『東谷・中島地区遺跡群 7 磯岡北古墳群』.
- 八幡塚古墳整理調査会 2013 『八幡塚古墳』.

第 1 表・第 4 表文献

- 1 石岡市教育委員会 2001 『石岡市遺跡分布調査報告』.
- 2 種石悠 2006 「茨城県稲敷郡美浦村弁天塚古墳の測量調査」『茨城県考古学協会誌』第 18 号.
- 3 関城町史編纂委員会 1988 『関城町史』別冊史料編 関城町の遺跡.
- 4 茨城県教育委員会 1960 『三味塚古墳』.
- 5 かすみがうら市教育委員会 2006 『富士見塚古墳群』.
- 6 筑波大学甲山古墳研究グループ 2019 「つくば市甲山古墳の研究—調査報告編一」『筑波大学先史学・考古学研究』第 30 号.
- 7 出島村史編さん委員会 1971 『出島村史』.
- 8 大森信英 1974 「箱式石棺集成」『茨城県史料』考古資料編 (古墳時代) 茨城県.
- 9 大塚初重・小林三郎 1968 「茨城県舟塚古墳」『考古学集刊』第 4 巻第 1 号.
- 10 石岡市教育委員会 1988 『要害山古墳群発掘調査報告書 (要害山 3 号墳)』.
- 11 美浦村教育委員会 1976 『光佛古墳』.
- 12 江戸崎町教育委員会 2000 『姫宮古墳群 1・2 号墳 水神峯古墳』.
- 13 茨城県教育財団 1980 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 I』.

第 2 表文献

- 1 志間泰治 1959 「角田市魚蘆沼古墳」『考古学雑誌』第 45 巻第 3 号.
- 2 筑波大学甲山古墳研究グループ 2019 「つくば市甲山古墳の研究—調査報告編一」『筑波大学 先史学・考古学研究』第 30 号.
- 3 大和久震平編 1971 『七廻り鏡塚古墳』 帝国地方行政会.
- 4 小山市教育委員会 1972 『栃木県小山市喜沢小山カントリー倶楽部内 桑 57 号墳発掘調査報告書』.

- 5 とちぎ生涯学習文化財団 2006 『東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』.
- 6 千葉県教育振興財団 2012 『研究紀要』27.
- 7 印旛郡市文化財センター 1994 『吉高浅間古墳発掘調査報告書』.
- 8 八幡塚古墳整理調査会 2013 『八幡塚古墳』.
- 9 飯田市教育委員会 1971 『妙前大塚(3号)古墳発掘調査報告書』.
- 10 袋井市教育委員会 2004 『愛野向山Ⅱ遺跡』.
- 11 三重県埋蔵文化財センター 2005 『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』.
- 12 三重県埋蔵文化財センター 2015 『東条1号墳・屋敷の下遺跡』.
- 13 志摩市教育委員会 2016 『おじょか古墳(志島古墳群11号墳)発掘調査報告』金属製品編.
- 14 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014 『加納南古墳群・稲積オオヤチ古墳群発掘調査報告』.
- 15 滋賀県教育委員会 1981 『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ』.
- 16 橿原考古学研究所 1981 『新沢千塚古墳群』.
- 17 橿原考古学研究所 1986 『宇陀地方の遺跡調査—昭和60年度』.
- 18 羽曳野市教育委員会 2002 『史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』.
- 19 京都大学文学部考古学研究室 1959 『大谷古墳』和歌山市教育委員会.
- 20 兵庫県教育委員会 2002 『梅田古墳群Ⅰ』.
- 21 兵庫県立考古博物館 2009 『塚ノ山1号墳』.
- 22 村井崑雄 1972 『岡山県天狗山古墳出土の遺物』『Museum』250 東京国立博物館.
- 23 西川 宏 1963 『備中三輪山第六号墳』『古代吉備』第5集 古代吉備研究会.
- 24 広島市教育委員会 1978 『空長古墳群発掘調査報告書』.
- 25 広島市歴史科学教育事業団 1991 『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告書』.
- 26 鳥取市文化財団 2004 『鳥取市倭文所在城跡・倭文古墳群』.
- 27 鳥根県教育委員会 1986 『古曾志大谷1号墳』.
- 28 仁木 聡 2015 「出雲の豪族とその序列—古墳副葬の鉄製武器について—」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』鳥根古代文化センター.
- 29 宇美町教育委員会 1990 『正籠古墳群 福岡県糟屋郡宇美町大字宇美宇正籠所在・正籠3号墳の調査』.
- 30 中津市教育委員会 1995 『幣旗邸古墳1号墳』.
- 31 杉井 健・上野祥史編 2012 「マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』173集.
- 32 東京国立博物館 1993 『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』吉川弘文館.

図版出典

- 第1・2図 筑波大学甲山古墳研究グループ2019をもとに筆者作成.
- 第3図 第1表文献をもとに筆者作成.
- 第4図 以下の文献をもとに筆者作成. 1:白井1995, 2:安藤ほか1978, 3:楢山1979, 4:茨城県教育委員会1960(蓋石は茂木1971より筆者再トレース), 5:白井2003.
- 第5・6図 第2表文献より筆者作成.
- 第7図 以下の文献をもとに筆者作成. 1:とちぎ生涯学習文化財団2006, 2:千葉県教育振興財団2012, 3:忽那ほか2019, 4:玉里村教育委員会2000, 5:大和久1974, 6,11:筑波大学甲山古墳研究グループ2019, 7:筆者実測(美浦村文化財センター所蔵)8:八幡塚古墳整理調査会2013, 9:群馬県埋

筑波大学甲山古墳研究グループ

- 蔵文化財調査事業団 2019, 10 : 出島村遺跡調査会 1992, 12 : とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2004
- 第 8 図 筑波大学甲山古墳古墳研究グループ 2019 をもとに筆者作成.
- 第 9 図 1,3,4,7,8 : 筑波大学甲山古墳古墳研究グループ 2019, 2, 5 : 忽那ほか 2019, 6 : 市原市教育委員会 1985 をもとに筆者作成.
- 第 10 図 土浦市教育委員会 1987, 茂木 1979, 筑波大学甲山古墳古墳研究グループ 2019, 山武考古学研究所 2001, 茨城県教育財団 1995 をもとに筆者作成.
- 第 11 図 石橋 2004 をもとに筆者作成.
- 第 12・13 図 筆者作成.
- 第 14 図 筑波大学甲山古墳古墳研究グループ 2019 をもとに筆者作成.
- 第 15 図 1～4 : 第 4 表文献をもとに筆者作成. 5 : 江戸崎町教育委員会 2000; 11 頁より引用 6 : 美浦村教育委員会 1976; 25 頁より引用.
- 第 16 図 筑波大学甲山古墳研究グループ 2019, 国学院大学大学院大場研究室 1959 をもとに筆者作成.
第 1・2・4 表 筆者作成.
- 第 3 表 田村 2018 より引用.

荒井啓汰 (筑波大学大学院)

加藤千里 (茨城県教育庁文化課)

滝沢 誠 (筑波大学准教授)



テル・エル・ケルク遺跡の発掘調査にて食事をされる常木晃先生（2002年）



つくば市桜塚古墳の発掘調査にて（2012年）